

Ⅲ 新潟市民の政治意識：全体構造とその動向

—— データの多変量解析 ——

会 田 彰

目 次

- 一、課題の設定（第Ⅲ部のためのまえがき）
- 二、企画と理論的前提
 - (1) 属性分類変数の構成
 - (2) 価値パターン分類——原型：和合価値と献身価値
 - (3) 価値パターン分類——業績価値と充足価値：アノミーの亢進
 - (4) アノミーと動的均衡
- 三、データ解析
 - (1) 新潟市民の価値体系
 - (2) 新潟市民の政治意識——その構造分析——
 - i 項目間相関の解釈
 - ii 一般因子解法の適用
 - iii 因子の次元構造
 - (3) 総合評価——結論——
 - i 市民性の成熟ポテンシャルと現実政治の可動性
 - ii エンパシー増大の危険性

一、課題の設定（第Ⅲ部のためのまえがき）

特定地域住民の政治意識を探るという課題は、科学的研究の課題としては、政治体系 (political system) における入力過程 (input process) の研究として位置づけられる。われわれの当面の課題、つまり新潟市民の政治意識の研究ももとより例外ではない。いいかえれば、これは決して新潟市の地方誌そのものの形成に寄与すべく目論まれているのではない。たとえ新潟という特殊な地域の地域特性を浮き彫りにすることが、比較政治研究の見地においていかに重要であつても、調査され分析されたデータの価値は、これまで蓄積されているデータや将来の企画の産物であるデータと比較検討さるべきモノグラフを追加するところにあるのではない。究極の目的は、この特殊素材を手がかりにして、「日本政治」の将来とか動向とかを予測することにおかれている。しかし、単一の調査研究プロジェクトがそれだけで、このいわば大それた目的を果すのに充実な素材を生み出すことはありえない。経費と作業能力に制限のあるすべての調査はそれ故、(1)それはこの目標志向プロジェクトの全体構図のなかのどの側面、どの部分を解明する仕事なのであるかと、(2)調査対象の個別性、特定性、つまりそこから一般命題をひきだす乱暴な試みを禁止する代表サンプルとしての不十全さをいかにして補うかを明確に宣言し、限定しておかなければならない。特殊を不当に一般化することがたいした嫌疑を受けることなくまかり通ることが、これまで、社会学、政治学のような後進科学の科学性を、いかに曖昧なものにしていたか、その反省の上に立つなら、本稿のような調査レポートが、上記の宣言と限定から稿をはじめめることを意図的に表明しておくことは、まだ必要な贅言であるといえよう。

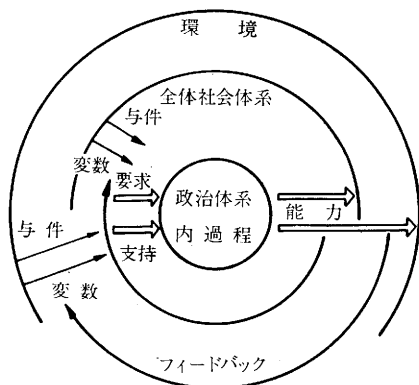
冒頭にのべたこの調査研究が政治体系のインプット研究であるという宣言は、第一の限定要請に応じた宣言である。トータルな「日本政治」の将来の動向を占うといった企画のために、観察・検証されなければならない事項をどう抽出するか、この問いに応じたフロー・チャートを用意するのが **political system** の理論モデルであり、バーンズ・モデル、イーストン・モデル、アーモンド・モデルなどを、入手可能な有効用具として想起することができる。綿貫譲治は主要にはガブリエル・アーモンド (G. Almond) の政治体系の「発展モデル」に拠りながら、そのような動向に関与する「与件」と「変数」を次のように整理している。⁽¹⁾

I 外生的与件

- 1、地政学的 (geopolitical) 与件
- 2、高密度社会としての与件
- 3、文化的与件 (国民性のごときもの)

II 外生的変数

- 1、国際環境
- 2、政治体系外の諸体系 (経済体系、文化体系、社会体系その他) の変数
 - a、経済成長の速度と変化
 - b、人口構成の変化
 - c、工業化と職業・階層構成の変化
 - d、都市化
 - e、価値体系の変動



第1図 政治体系の変動モデル
(綿貫、日本の政治社会 P.11より)

Ⅲ 内生的与件

1、政治機構

Ⅳ 内生的変数

1、政党の「体質」

2、政治エリートの補充パターン

3、政党内および政党間のリーダーシップ

4、政治制度（選挙制度、政治資金、行政形態等）

ⅠとⅡとは、政治体系の外から生じ、政治体系への入力（input）の質と量を規定する条件であり、このインプ

ットは一般的には、政治体系にたいする「支持」と「要求」の要素とすることが出来る。これにたいしⅢとⅣは、これらの入力を政治体系からの「出力」（output）、すなわち「政治体系の能力」に転換させる過程にかかわる条件である。これらのインプット・アウトプットの投入・産出過程は相互因果の循環過程、あるいはフィードバック・システムと観念されるから、政治体系の変動モデルは次のような図（第1図）で最も簡潔に表示されることになる。⁽²⁾

国民の政治意識はⅢ、Ⅳの条件、つまり、現実の政治体系の能力によって規定されるものであったり、それに対する反応であったりするものであるから、この（政治意識）の実態を究明することは、

これを媒介にして政治制度や政党の実態（内生的変数）を評価する作業を含んでいる。しかしこの種の調査研究の第一次の関心焦点は、政治体系にたいする支持と要求の質と構造の評価であり、これらを規定する諸条件の現実の関連とその変化を探ることである。このことが、地域住民の政治意識の研究が政治体系へのインプット・プロセスの研究であるという限定の意味である。

第二に、(2)の問いに対応する限定は方法論的提案を含む限定である。市民の支持と要求は、政治のアウトプットからのフィードバックを別にすれば、Ⅰの外生的与件とⅡの外生的変数によって規定される。与件と変数の区別は、短期的に変わりにくい条件と変りやすい条件との区別であり、ほんらい相対的な程度の別にはかからない。しかし、特定時点の特定地域における調査データの分析では、与件は非常に広く一般的な背景であるものであるから、結果解釈に際して配慮すべき前提と措定し、データ蒐集の企画のなかに与件の観測、計量の意図を含ませないのが適切であろう。たとえば、国民性の検証などは、それ自体を特定調査の目的とすべきものでなく、特定調査と特定調査の各結果の比較対比で検証されるものというべきであろうし、国民性といった与件は、特定調査データの意味解釈の参照枠となるにすぎぬ曖昧な常識、あるいは先入観とみなしておく方が無難である。いずれにせよ、政治的意識に規定的意義をもつ外生的要因として計測すべきものは変数であって与件ではない。

このような識別による限定をやっておかないと、データはともすれば既存のステレオタイプを再確認する素材にしかならないということになりかねない。とくに比較文化論的アプローチの場合には、課題がマクロなレベルで設定されるから、「所与」条件から因果的に帰属させうる意味の適合連関パターンである理念型(Idealtypus)の構成が認識の目的となりやすい。理念型は比較のコンテクストにおいて顕著な意味特性(traits)を、極限化(純粹培養)して無矛盾な意味統合のパターンとしたものであるから、その構成に寄与すべく調査データが活用される場

合には、統計的多数傾向が誇張されて、少数傾向が捨象されるか過小評価されるかになりやすい。そのような操作は、データの代表性・典型性を保証する根拠にもとづいて許容されるものであることはいうまでもないが、その根拠が稀薄な場合には、それらをさらに補強すべき他のケース・スタディ（特定調査）を継続する意図をもって、当面その調査研究の成果は、一つのモノグラフを追加するところにその価値があるにすぎないことを認定しなければならない。

方法的開拓が必要なのはこの点にある。つまり、貴重な時間と労力を投じた個別調査のデータ価値を高めるには、そのデータ自体のなから「動向（将来の変動）予測」を可能にするような、データ内の潜在構造（latent structure）をひきだす分析技法（そのためのデータ処理法）が開発、あるいは活用されなければならないということである。理念型による認識の最大の欠陥は、それが意味の適合連関で構成される統合モデル（無矛盾モデル）である故、その発展や変化をそのモデル自体のなかで検討しえない認識用具である点である。もちろん複数の理念型を構成することによって、型と型との差異を確認し、型から型への移行をもって変動を理論化することはできる。しかし、変動の契機やその力動的プロセスそのものをその概念枠内で検証できないことが重大な欠陥であり、そのことがこれを静態モデル、あるいはステレオタイプに化しやすいう理由であるといえる。全体社会の構造や政治過程などを社会体系、政治体系のようなシステム・モデルに準拠して研究する方針が普及してきたのは、理念型で統合される具体的構造パターンを、相互に自律的で矛盾の、さ、え、ある、構成要素間の力動的関連パターンに解析することが、動態分析のために不可欠であったからだといえる。（システム・モデルがたとえ均衡モデルとして構成されたとしても、均衡の破壊→均衡再建のプロセスが変動分析を可能にするし、変動が異常なのでなく常態なのだ）と観念すれば、均衡モデルが「構造的緊張モデル」あるいは「発展モデル」として再構成されるようになるモデル理

論の性格変容の経過はごく自然なものといえるから。)

しかしここで特筆したいことは、わが国でおこなわれている政治社会学的研究の実態としては、少数の事例を除いて、多くはトータルな政治体系およびその下位体系の分析にシステム・アナリシスの方針をとりながら、具体的なインプット、アウトプットについては依然としてこれを理念型で説明する特性分析 (traits-analysis) をおこなうにとどまっているということである。このことは、インプット分析についていえば、政治意識研究が実際の調査結果の分析において、多くは統計的多数傾向の読みとりにとどまり、それに対抗する少数傾向がどのような態度分極化の基軸に沿って形成されているか、要求、関心、目標志向の対抗関係が一元的に、全般波及的に、つまり拡散的 (diffuse) に形成されているか、それとも、多次元に、そしてどのような交錯の型をなして形成されているか、

これらの解析が不十分であるため、政治へのインプットそのものがそれ自身内部的ストレーン (strain) をもった構造として扱われることが少いことを意味する。(もともと態度構造の多次元解析は心理学分野で開発された方法であるから、筆者の意見は、こうした方法を摂取して理論検証に適用する調査用具の活用が、社会学、政治学分野で僅少に過ぎるという慨嘆にはかならない。) 個人パーソナリティのレベルでは、社会的態度の変容は、「認知的不協和」(フェスティンガー)³⁾を起動因とすることが確認されているが、同じく社会体系レベルでは、政治共同体を構成する民衆の集合的意識や行為の内部構造が相互に葛藤や不整合を、すなわち緊張をはらむ構造をなしていることが、インプットの変化を媒介にした政治体系の変動を予測させるものであるから、政治意識の内的ストレーン構造の分析が不十分であることは、この種の研究に変動予測面での無能力という致命的な欠陥をもたらすことになる。

内的ストレーン構造の解析においては、調査された諸変数(あるいは属性)の各カテゴリーにかかわる度数分布

の多寡よりも、諸変数間の関係を明らかにすることがいっそう重要になる。たとえば、「政治的無関心」というカテゴリーに入る有権者の多寡よりも、政治的アパシー \leftrightarrow コミットメントの態度分極化の基軸が、たとえばイデオロギー \leftrightarrow 脱イデオロギーの分極化基軸と、あるいはデモクラシーの制度支持 \leftrightarrow 制度不信の分極化基軸と、さらには権威主義的性格尺度基軸とどのように並行し、ないしは交差しているか等々の検討がいっそう重要である。仮に強い政治的コミットメントの態度が脱イデオロギーの方向に布置している態度傾向であるとすれば、それは政党の多党化構造か、政界再編か、あるいは既成政党の体質転換かを迫る政治の変革を予測させるインプットの内部ストレーン構造であり、政治的アパシーが制度不信の傾向と同居する構図を示すなら、それは将来の政治的危機を予告するインプットの内部ストレーン構造であるというような判断を可能にするであろう。この種の解析を可能にする方法は一般に、多岐、多元的な諸属性ないし諸変数間の共変（あるいは相関）関係を分析し、総体的な共変マトリックスに潜在する基本的媒介構造を検出する方法、すなわち多変量解析（multi-variate analysis）の方法である。本稿はこの目的（つまり政治体系へのインプットの内部ストレーン構造の解明）のために、サーストン（L. L. Thurstone）の第二次の因子分析（Second-order Factor Analysis）による一般因子 \parallel 多群因子複合解を適用した試みである。⁽⁴⁾

〈注〉

- (1) 綿貫謙治『日本の政治社会』（東大出版会）六一―一ページ。
- (2) 同書、一一ページ。
- (3) Festinger, L.: A Theory of Cognitive Dissonance. (末永俊郎監訳、認知的不協和の理論、誠信書房)
- (4) Thurstone, L. L., Multiple-Factor Analysis, 7th. Imp. 1965, p. 411 ff.; Horst, p., Factor Analysis of Data Matrices, 1965, p. 492 ff. などを参照。

二、企画と理論的前提

これはデータ処理能力にかかわる暫定措置（というのは筆者の利用しうるコンピュータの機種更新が今日の時点で行なわれているためだ）であるが、本稿の分析は、この調査によってえられた実回収標本（男二六六、女三一四一、計六〇七）より女性サンプルを除き、男性サンプルからランダムに抽出した一〇〇の第二次標本のみを処理した結果にもとづくものである。したがって、本稿の部分（第Ⅲ部）に限って新潟市民の政治意識は男子有権者のそれを意味する。解釈を促進する方策として、本稿ではデータの諸標識を、（Ⅰ）属性分類変数（八次元、二八項目）と（Ⅱ）政治的態度変数（九次元、三四項目）とに二分して組織した。——第1表参照——この区分は統計学的用語としての属性と変数の区分ではない。またフェースシート部分と態度変数部分の区別でもない。本稿のデータはすべて「定性的標識のデータ」として処理されている。第一次の集計は、「四分相関表」によるクロス分類をもっておこない、諸標識間の関係はすべて「四分点相関係数」(Four-Fold Point Correlation Coefficients)によって計測した。したがって統計学のタームを厳密に適用すれば、すべてが属性（ないしカテゴリ）であって変数（定量的データの標識）ではない。しかしここでは質的変数もありうるという立場に立つてこの用語を使用する。また、「属性分類変数」のなかには、年齢別、職業・階層別などの客観的カテゴリ分類のほか、価値志向パターン分類とか階層帰属意識とか、支持政党による分類カテゴリとかの主観的態度変数による分類標識も含まれている。要するに、これは前に引用した綿貫の「政治体系の外生的変数」をとらえるに足る最も大まかなサンプルの属性識別基準を設定したものにはかならない。

（Ⅲ）の政治的態度変数はこれにたいし、分類カテゴリとする意図を含まぬ特定ト

ピックスに対する特殊反応の標識である。

(1) 属性分類変数の構成

特定の住民意識データの内的ストレーン構造の解析において、先ず欠落の許されぬ条件の変数は、綿貫分類のⅡ—2項にあたる「政治体系外の諸体系の変数」であろう。しかし、そのうちa（経済成長）はb、c、d、eすべての構造変化にかかわる規定動因であるから、他の四項と次元を異にする変数（相対的にいって与件に近いもの）とみなしてよいであろう。（Ⅱ—1項の国際環境の変数も同様）。かくして、

b、人口構成の変化による内的ストレーン構造をとらえる標識——(1)世代属性性

c、工業化と職業・階層構成の変化による内的ストレーン構造をとらえる標識——(2)学歴・職能属性性、(3)収入階

層属性性、(3)階層帰属感属性性

d、都市化による内的ストレーン構造をとらえる標識——(4)地域的定着——流動属性性、(6)アーバン・エコロジカル

属性

e、価値体系の変動による内的ストレーン構造をとらえる標識——(7)支持政党属性性、(8)価値パターン属性性

という対応で属性分類変数が選択構成される。ハイ・スピードの経済成長が今日たとえば、二〇才代と三〇才代というわずかな落差をもつにすぎない年令層の間にすら、価値観のかなり大きな差異を生みだしていることは周知のところである。平均余命の延長や若年層の相対的減小などによるピラミッド型から矩形型への人口構成の変形などがそれに加わり、若年労働力の不足、若年層の相対的賃金上昇、生活享受の可能性などを媒介にして、社会変革の担い手としての役割を、20才代青年層が放棄しつつあると見るような傾向もあるし、逆に一方で、可能性として

表1 変数構成と因子負荷量
I 属性分類変数(8次元, 28項目)

	G	I	II	III	IV	N
	一般因子	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	%
(1) 世代属性						
① 20 才 代	.159	-.023	.376	.086	.150	23
② 30 才 代	.109	.216	.294	-.031	-.006	32
③ 40 才 代	.001	.080	-.371	.050	-.062	19
④ 50 才 以上	-.246	-.276	-.343	-.074	-.058	27
(2) 学歴・職能属性						
⑤ 中等学歴以上	.310	.313	.512	.109	-.024	62
⑥ 商工サービス自営	-.145	.142	-.126	-.162	-.105	18
⑦ 管理・専門・技術	.338	.175	.024	.309	-.101	26
⑧ マニアル労働	-.203	.024	.187	-.273	.005	21
⑨ 事務労働	.223	-.062	.096	.213	.252	17
(3) 収入階層属性						
⑩ 収入下層(150万以下)	-.007	.074	.240	-.174	.541	50
⑪ 収入上層(200万以上)	-.070	-.001	-.256	.030	-.349	20
(4) 地域的定着・流動属性						
⑫ 出生以来定住層	-.219	-.144	.002	-.125	-.343	31
⑬ 定住5年未満層	.184	.098	.277	.035	.448	33
⑭ 県外出身者層	.082	.104	.073	.036	-.033	7
(5) 階層帰属感属性						
⑮ 上層帰属傾向(中の上以上)	.094	-.071	.049	.138	-.089	18
⑯ 下層帰属傾向(下の上以下)	-.044	.242	-.036	-.166	.123	21
(6) アーバン・エコロジカル属性						
⑰ 本庁・入舟	-.075	.045	-.089	-.069	-.099	21
⑱ 関屋・小針～内野・赤塚	.159	-.036	.178	.153	.017	30
⑲ 石山～鳥屋野	.122	.086	-.150	.122	.033	23
⑺ 沼垂・山の下・松浜	-.185	-.097	.045	-.190	.114	23
(7) 政党支持属性						
⑳ 自民支持層	-.336	-.592	-.254	-.029	-.220	44
㉑ 社・共支持層	.082	.538	.045	-.140	-.068	28
㉒ 公・民支持層	.160	-.030	-0.99	.087	.763	7
㉓ 支持なし層	.297	.069	.169	.285	-.134	13

(8) 価値パターン属性						
⑤⑥ 業績価値パターン	.167	.037	.076	.130	.148	33
⑤⑦ 献身価値パターン	-.195	.174	-.074	-.257	-.113	51
⑤⑧ 和合価値パターン	-.155	-.004	-.083	-.137	-.095	76
⑤⑨ 充足価値パターン	.340	-.011	-.040	.397	-.057	25

Ⅱ 政治的態度変数（9次元34項目）

		G	I	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	N
		一般因子	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	%
1 市政レベルの態度変数							
(1) 市政に対する関心 態度標識	②① 市政に不満	.229	.161	.090	.187	-.138	24
	②② 市予算見たことあり	.184	.122	-.130	.183	-.046	37
	②③ 市報いつも見る	-.103	.114	-.379	-.063	-.150	60
(2) 市政に対する首位 要望事項	②④ 便益向上施策	-.252	.181	-.020	-.342	-.063	44
	②⑤ 安全向上施策	.087	-.343	.168	.212	-.006	22
	②⑥ 生活文化向上施策	.267	.232	-.165	.216	.071	30
(3) 市政への 働きかけ 通路	②⑦ 自発的グループ	-.162	.037	-.080	-.155	-.147	24
	②⑧ 自治会・町内会	.011	.106	-.105	-.022	.059	49
	②⑨ 職能的団体組織	.088	.118	.046	.029	.053	11
	②⑩ 政党あるいは議員	-.043	.058	-.242	-.056	.198	35
2 国政レベルの態度変数							
(4) 投票行動	③① 投票予定政党, 自民	-.306	-.716	-.204	.041	-.172	45
	③② 同上社・共	.094	.456	.134	-.105	-.091	29
	③③ 同上公・民	.209	.003	-.077	.123	.761	8
	③④ 投票政党未定	.173	.325	.203	.042	-.201	18
	③⑤ 投票政党に変更あり	.096	.377	-.063	-.060	.098	23
	③⑥ 支持政党を強く支持	-.107	-.081	-.257	-.049	.108	30
	③⑦ 以前の自民支持	.082	.266	-.160	-.000	.053	6
	③⑧ 以前の社共支持	-.046	-.038	.015	-.078	.253	8

(5) 制度的⇔ 変革的の 行為選好	③⑥ 政党育成が大切	-.007	.048	-.373	.044	.013	78
	③⑦ 抗議運動が大切	.027	-.013	.170	.008	-.037	6
(6) 政治的 主体意識の 標識	③⑧ 政治より自分の生活が大切	-.144	-.281	-.053	-.006	-.135	63
	③⑨ 政治のことは政治家にまかせよ	-.214	-.433	-.136	-.016	-.036	19
	④⑤ 自分は政治に影響を及ぼす力をもっている	-.045	.186	-.414	-.072	.151	15
	④⑥ 政治にコネはきく	.142	.315	-.031	.026	.008	68
(7) 政治家イ メージ	④⑩ 政治家は清潔であるべき	-.066	-.152	-.303	.089	-.230	84
	④⑪ 政治家は目的のため手段を選ばぬ	.037	-.005	-.250	.106	-.084	39
	④⑫ 政治家は主義に忠実であるべき	.032	-.074	-.153	.088	.060	82
(8) 行政評価 態度の標 識	④⑬ 政府は責任を果していない	.122	.096	.187	.059	-.018	84
	④⑭ 地方への介入よくない	.173	.157	-.032	.117	.074	35
	④⑮ サービス向上すれば増税も可	-.012	.276	-.019	-.124	-.031	22
	④⑯ 行政サービスが下落しても減税がよい	.065	-.337	-.167	.242	.060	41
(9) カレント トピックス 関連反応 態度変数	⑥⑩ 田中首班登場に、政治の方向転換を期待	.024	.207	-.056	-.036	-.093	81
	⑥⑪ 日中関係の新展開を期待	.139	.105	-.144	.093	.272	20
	⑥⑫ 過密・過疎問題解決期待	-.056	.040	.228	-.119	-.038	35
ΣF^2		1.70509	3.13525	2.38902	1.31491	2.66352	
$\Sigma F^2/N$		0.02750	0.05057	0.03853	0.02121	0.04296	
%		2.8	5.1	3.9	2.1	4.3	

は、その立場から社会保障や社会福祉に強い関心を寄せざるをえなくなる老人層が「革新化」することも考えられる。そこまで至らなくとも、若年層の「脱革新」、老年層の「脱保守」が趨勢として強まるといふ予想は成りたちそうである。こうして既存のステレオタイプ（あるいは原型）が崩壊する萌芽はでていると推定されるから、この「きざし」を示すものを、あるいはその存否を、住民意識の総体構造の中に検証しようというのが本稿の意図である。

このような内的ストレーン構造は、多変量解析によって複数次元の立体的な構造模型を抽出することをしなければこれを見ることが

できないというのが筆者の意見である。それが「潜在構造」であるからにはかならないが、保守—革新の傾向に関連した事例をとりあげるなら、ある世代、あるいはある職業階層が、イデオロギーや政治的行動傾向としては顕著に革新的であって、しかも日常の人間関係を律する価値体系の面ではきわめて保守的、伝統主義的であるとか、ある層の「脱革新化」は「保守化」ではなくて、同時に「脱保守」でもあり、要するにそれは政治的制度不信の傾向、つまり「脱政治」の態度傾向にほかならぬというような観察はかなりしばしば成り立つのであるが、その場合には、少くともイデオロギーの保守 \rightarrow 革新、価値体系の伝統主義 \rightarrow 反伝統主義、政治的制度不信 \rightarrow 制度支持という三つの独立の次元が形成されていることになる。この三次元複合で態度の内部対抗構造が潜在構造としてあるということになるから、各次元ごとに態度布置が計測されなければならない。また各次元を分かち基軸と基軸との交叉のパターンを検討して、各次元相互の関連や独立の程度を見ることもまた重要になる。

(2) 価値パターン分類——原型：和合価値と献身価値

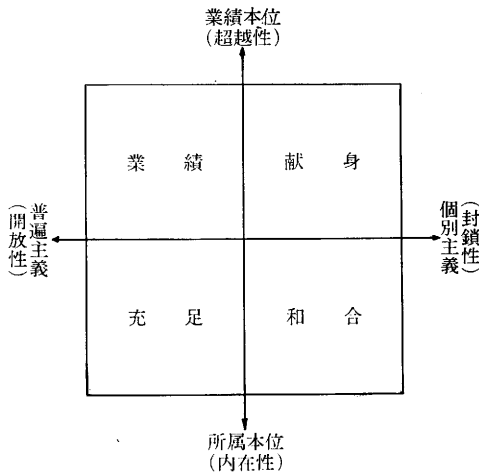
eの価値体系に関連した属性分類を、(7)支持政党属性と(8)価値パターン属性の二つの次元に区別したのは、そのような予想にたつて、特殊政治的価値志向と一般的価値志向とを区分しておくことが必要と考えたからである。前者は質問紙にたいする第一次反応をそのまま分類カテゴリーとしたものであるから特別の説明は不要があるが、後者の価値パターン分類については少し詳細な議論が必要である。

価値は「人間の行為の指針として働く望ましい目標状態の一般的叙述」(スメルサー)⁽¹⁾であり、やや詳細にいえば、クラックホーン(C. Kluckhohn)の著名な定義の⁽²⁾とく、「行動を支配する一般化された観念であり、自然についての、その中の人間の位置についての、人の人⁽³⁾にたいする関係についての観念であり、また、人間—環境や人

人間の関係にかかわる望ましいものと望ましくないものについての観念⁽²⁾である。ほんらい、価値は人間の社会的行為の不可欠の構成要素(コンポネンツ)の一つなのであるが、それは他の構成要素(用具的資源である便益(facilities)、動機づけ要因(motivation)、規範(norm))に比して「一般性レベル」の高い構成要素であること、オリエンテーションの双極性をもった「選択のジレンマ」をもつことの二点で顕著な特性をもっている。定義の中にある「一般化された」観念という表現は前者の特性を規定しているものであるが、それは規範意識のように明確に限定された状況や、特定のコンテキストに限定された行動基準を設定するものでなく、全般滲透的(diffuse)にあらゆる生活局面の行動をパターンナイズするような基準である。イデオロギーは価値の一種ではあるが、経済的政治的利益状況のコンテキストに特殊化された正当性信念であるから、全面的に価値体系を代表するものではない。政党支持態度で観測されるイデオロギーは、さらに一層特殊限定的である。ほんらいの価値は、むしろそのような目的合理的ないし価値合理的行為のみならず、慣習的、伝統的、情緒的な行為をも貫いて、それらに一定の選好傾向をもたせるような基盤である。第二に、「望ましいもの——望ましくないもの」を分かつ基準であることは、価値が二律背反的オリエンテーションという可能性構造の上にあるものであることを示す。「便益」のごとく、効率性の基準で望ましいものの判別が自明であったり、飢餓や抗すべからざる強権のために、それを充足しなければ、あるいはそれに同調しなければ生存が不能となるような「動機づけ要因」あるいは「規範」の場合と異なつて、「価値」は、背反的な方向選択が共に可能であるような状況で顕在化するという特徴をもっている。

以上の二点の特性のため、真に価値を観測することは甚だ困難な作業である。それはパーソンズ(P. Parsons)がやったように⁽⁴⁾、「型の変数」(pattern-variables)の組み合わせで論理的可能範疇を構成し、二方向を同時に最大限強調することが不可能であるという「選択のジレンマ」状況を設定し、その場におけるウェートづ

第2図 価値の類型



けを計測することで果さなければならない。先ずモデル構成の手順として、オリエンテーションの対象がなんであれ、その対象を認知したり評価したりする際、対象のどの側面を強調することが、論理的可能性として二律背反的にありうるか？（答えはたとえば、パーソンズの *Quality—Performance, Diffuseness—Specificity*、対象と行為主体のかかわりかた（つまり、主体の志向態度の組織化）をどうつくるかが論理的可能性として二律背反的にありうるか？（たとえば、*Affectivity—Affective Neutrality, Particularism—Universalism*）の組み合わせから、最も一般的な価値志向パターンの各種が識別できるといふ発想をたてなければならない。

作田啓一は、パーソンズのこの発想に依拠して日本文化に関する具体的なエラボレーションを加えたベラー（R. N. Bellah）⁽⁵⁾を参照しながら、四つの価値志向パターンを設定してゐる⁽⁶⁾。つまり、*Quality*（属性本位）——*Performance*（業績本位）、*Universalism*（普遍主義、あるいは *Self* 志向）——

Particularism（個別関係主義、あるいは *Collectivity* 志向）の二本の論理的双極性基軸がつくる直交座標上の四つの象限に四つの価値類型を想定する構想である。

和合価値は、「共同体的性格」とか、「自然村型の自治意識」⁽⁷⁾とか呼称されてきた日本人の政治意識（あるいは一般に社会意識）の原型、あるいはステレオタイプの基盤をなす価値パターンである。同族団に擬制された庇護—恭順の関係構造のなかに所をえている「帰属感」が安心の源であり、それに則った「分」

を尽す行動様式が正統な秩序をつくる。この秩序を攪乱する「怪しからん」行為は、恩を忘れ、「分」をかえりみず、世間のならわしを会得せぬままに、才を外にちらつかせ、「よその世界」で通用するかも知れぬが、ここ（ムラ、仲間うち、要するに in-group）には通用しない理屈をふりまわす未熟者の行為である。人間を計る価値尺度が、「修養のできたえらい人」と「修養のたりない小者」を識別する基準であり、「できた人」は必ずしも専門的な知識や技能に長じている人ではない。「ハラ」で理解する人、黙っていても温情ある庇護のはからいのやれる人、要するに、閉鎖的 in-group である「世間」の価値基準をよく体现している人である。⁽⁸⁾この正統的秩序の尊重の表現が「和」をもつて貴しとする「和合同調主義」の価値パターンにはかならない。これが地域社会の有力者支配を支え、名望家政党と陳情政治の体質を温存させてきたものであることはしばしば確認されてきたところである。政策、識見が二の次であり、頼りになる庇護者であることを「人格」として評価する白紙委任型の人物本位の投票もこの和合価値タイプの発現形態の一つであるといえる。

これを一般的用語でいえば、日本の社会では、真理や正義のような普遍主義的に妥当する理念へのコミットメントよりも、個人の集団に対する関係を維持するに必要とされる行為の方が高く評価されるということにほかならないが、この個別関係主義パーソナル・リレーションズのオリエンテーションが積極的な営為(Performance)、顕著な功績尊重という emphasis と結びつくパターンが「献身価値」である。ベラーが、徳川時代の宗教にまで遡って、急速な日本の近代化に貢献したエトスを探ったときに、つき当たったのがこの価値パターンであり、これは、馬車馬的な高成長を遂げた戦後日本の経済社会の「政治文化」と、軍国主義日本の破局をもたらした「政治文化」との同質性を探る石田雄のような論者が、「同調」と「競争」の結びつきを日本の伝統的な文化パターンとなし、「同調集団内の過当な忠誠競争」というイメージを結晶させるときに解明している価値パターンである。⁽⁹⁾「和」の精神の強調は、前述のような脈絡で、

日本社会のなかでは常に高い位置を占めておったのであるが、ベラーが強調するところは、日本の社会でこれが尊重されるのは、「調和」それ自体が目的だからなのでなく、集団成員間の調和が「集団目標の達成」を円滑にし、首長にたいする忠誠を確実にする故に評価されるということである。だから、忠誠は単なる受動的な献身でなく、能動的な奉仕と営為になる。作田の考察によると、集団の目標達成をめざして他者をマニピュレートするリーダーの実行力は、確かに日本では伝統的に高く評価されてきたものであり、ここに、エリート層の価値と多数民衆の価値とが分化して結びついている一つのパターンがあるという。論争好き、闘争好き、過大な野心、その他の破壊的行為を強く非難する共同体的規制は、マジョリティ大衆が、自己の行動を律する価値として深く内面化してきたものであるが、そのような「和」の精神から生ずる「連帯」というエネルギーの出力を、どのように操作して集団目標に結びつけるかがエリート層の最高の価値であったといえる。⁽¹⁰⁾

明治以降、天皇制絶対主義の完成とともに、この献身価値と和合価値の結合は、特に著しく強化され、家族国家観のイデオロギー、寄生地主制下の村落秩序、官僚制と共同体の癒着（行政末端としての自然村組み込みの方式）などは、この結合様式によってその精神的エネルギーをえていたということが出来る。さらに付言するなら、この精神構造（すなわち、同調集団内の過当な忠誠競争の雰囲気）は、今日に至るも、左翼革新勢力の反体制運動にさえ、そのエネルギーを付与するエトス供給源であり続けているということもできる。

(3) 価値パターン分類——業績価値と充足価値……アノミーの亢進

これにたいし、普遍主義的な「業績価値」と「充足価値」とは、日本の伝統的な文化の型としては、いわば「日陰げ」の価値であった。的確な作田の文章を借りてこの意味を衍延しておこう。

「日本の社会では価値が集団の要請と密着しすぎていたところから、個人の欲求充足はそれ自身で正当な権利であるとは認められにくかった。……それは特定の区切られた時間や場所で表現を許される許容的 (permissive) 価値として認められるにとどまった。そのように、消極的に私生活が価値づけられていたために、私生活は宗教||道徳的な色彩によって色づけられることを免がれ、審美的、鑑賞的なスタイルの規制を強く受けることになった。美を愛好する日本人という性格特性のもつ意味はこのようなものである。……勤勉、報恩という規範の適用を免除されている隔離された領域で、愛情や消費が審美的に享樂された。」⁽¹¹⁾

日本の戦後デモクラシーは、いわばこの「日陰げ」の価値であったものを解放し、それらを今や正統の価値、あるいは積極的な価値に転換させたという意味をもっていた。マイホーム主義、感性至上主義(カッコよさの礼賛、いいタッチ、いいセンスということが価値の基準となること、無拘束||無責任の状態をそれ自身正当に主張しうる権利と誤認する当世風エビキュリアンの信条をこう呼びたい。)などは、戦後の充足価値の一つの低俗な発現であろうし、逆に、自由企業制を背景にした「なりふりかまわぬ」営利追求や、モータリゼーションの出世競争は、同様に低俗な、戦後の業績価値の具現であろう。

これらの価値は、日本の社会の大勢としては、まだ真に「普遍主義」の基準によって「昇華」されるところまで純化されていない。そのために、戦後デモクラシーの進展は、概して常に、デモクラシーの危機への危惧と同居することになる。それは結局この価値転換が、「社会的アノミー」(anomie)を亢進させるのが不可避であるからにはかならない。社会的アノミーは、いまわれわれの問題考察に直接関連した脈絡に限って見ると、理論的に区別できる二つのレベル(パーソナリティ・レベルと社会体系レベル)の局面で生ずる。パーソナリティ・レベルの問題は、デ・グレーシアの「単純アノミー」(simple anomie)⁽¹²⁾の論理で捉えられる問題であり、社会体系レベルの問

題は、ほんらいのデュルケームの観点を想起することを必要にする問題である。単純アノミーは、大部分の日本人にとってほとんど唯一の集団超越的な価値（理念的文化）である「民主主義」の文化が、伝統的な価値と葛藤し、中和し合い、価値の規範的拘束力を弱めるところから生ずる。これは先ずパーソナリティ内部で、「たてまえ」（としての理念的文化）と「ほんね」（としての伝統的文化）の分裂、葛藤となつて現われ、社会体系レベルでは、民主主義的制度の現実の運用時における変質、歪み、あるいは空洞化となつて現われる。日本人におけるこの「ほんね」、「たてまえ」の分裂についても、透徹した分析が作田によつてなされているが、彼の指摘のように、およそ「たてまえ」の価値が「ほんね」の価値と完全に合致している社会は現実にはないといつてよいであろう。問題はだからこの分裂が存在することにあるのではなく、むしろ、この両者が合理的（自覚的）に使ひ分けされず、無自覚に相互滲透するところにある。わかりやすいえば、「ほんね」の姿をとっている「たてまえ」、いつも「たてまえ」と見做される「ほんね」が余りに多く、総体として「型の喪失」、「シニシズム」を促進し、アノミーの亢進に貢献する点にある。社会の変動期（過渡期）に、世代、地域、階層、職能の種々相の間に、著しい断絶が見られるようになるのはいうまでもないが、概して「移動性」（mobility）の高い世代、階層が、旧来の閉鎖的生活空間の中に通用していた集団秩序原理の無効化を実感し、その呪縛を断ち切る行程で一步も二歩も先行する。しかし、この部分も、それにかえて普遍主義的な倫理を内面化するのとはそう容易ではないし、遂に内面化しないままに終るかもしれない。仮にこの価値転換が進行しているとすれば、それ（価値の近代の様式）は社会の一部においてはすでに取り入れられているけれども、他の部分ではまだ取り入れられていないという状況になる。また個人の意識の内部では、その表層の自覚された部分では、むしろ当為の形をとつた規範意識になっているけれども、深い感情の層はたえずこれに反発する状態になる。こうして新しい様式が「たてまえ」、古い様式が「ほんね」になつて使ひ

分けされる。あるいは逆に、知識層や若年層においては、新しい様式が「ほんね」であって、この様式を他の社会層に対する関係においても一貫させるにはまだ強い抵抗があつて困難であるという事情を配慮して、古い様式を「たてまえ」として尊重してみせる。いずれの場合でも、このように分析できる場合は、変動期社会のノーマルな順応調整現象であつて、またある場合は、現実精査の上にたつ戦略的選択の過程であつて、そうである限りは、ここにアノミーや社会解体は必ずしも問題にならない。問題はむしろこの合理的な使い分けがなされず、「たてまえ」であるものが、強迫的に「ほんね」とされ、「ほんね」であるものが強迫的に「たてまえ」とされるメカニズムである。

脱政治や脱社会の態度がこの面から肥大する。たとえば、戦後における充足価値の聖化は、戦前の滅私奉公から「滅公奉私」に一転するような激しい振子の揺れを生みだしているが、これを説明するものはないであろうか？

健康で文化的な生活を営む権利とか、幸福と自己実現の追求とか、純粹に内面の良心のみに従う自由とかの普遍主義的価値が、思想や法の理念のレベルにおいてのみ、むしろ所与として与えられ、現実の生活レベルでは、これの具体化された姿をイメージとして描くことさえ不能であつたり、(一方で、理想と余りにも乖離した現実のため、他方で、現実を、これらの理念さえ制度化されていない他の現実と対比して評価する比較検証能力が主体の側で欠如するため)、労苦と不撓の意志で、これらの価値の実現を一つ一つ追求する体験の裏打ちが欠けていたりする場合には、これら(普遍主義的価値)はネガティブな方向で、つまり、他の価値(和合価値や献身価値)をコンパルシヴに断ち切ることによって維持される。普通ある程度はいつも「たてまえ」である価値が、コンパルシヴに「ほんね」とされるメカニズムがこれである。自律を聖化して、しかも自律的行為を体得していない人の場合、現実の他人との共生関係は、すべてこの行為者に、独立自尊と依存隷従のアンビヴァレンスを呼び起こすものになる。こ

のアンビヴァレンスを断ち切るために、あらゆる種類の社会的拘束に無差別な拒絶反応を示すことが生じがちになる。しかるに、人が自由でありうるのは、いうまでもなく、これを理念としている社会制度が、人が自由でありうる共同の条件を、恣意や特権、あるいは暴力をもって破壊するあらゆる力を禁止する拘束を、共同体に課しているからにはかならない。人が「健康で文化的な生活」を平等に享受できるようにするためには、合意によって正当化され、それ故に「普遍的」に拘束しうる力となった権力が、健康な生活の基盤を破壊する「私権の濫用」を強力に規制しなければならぬし、「社会的弱者」の生活保障のために、社会的強者の負担義務を普遍的に制度化する強制が必要である。かくして、個人的セルフ価値は、たとえそれが個人主義的なものであっても、社会的規制（拘束）なしに実現しえないものであることは明らかである。何よりもそれが自然法的価値として、人間「普遍」の権利として要求さるべきものであるならば、その普遍主義の故に、個人みずからのセルフイッシュな（自分だけの脱出、特別配慮、特権要求、恩寵や特典による例外措置、恣意や暴力によるルール侵犯のような）行動動機をきびしく禁止し、みずから社会的責任を担うべき義務を、「普遍主義」の観点からみずからに課することなくして実現しえない価値である。これは権力の濫用や腐敗を監視すべき義務、資本の専横を規制すべき義務であるが、同時に、資本と権力の「人間性破壊的」な支配体制に加担することによって社会的ドロップ・アウトを正当化し、社会的責任を拒否し、一切の社会規範の拘束を廃棄しようとする「恣意的」衝動を、みずからに対して禁止する「市民としての」義務である。だから、現実の集団規範、組織規律、世論の規制力、時には「自由のための規律」をさえ、無差別に「自由」に対する脅威と見、自律の否定と見ることは、特定の社会や文化（たとえば国家独占資本主義体制というような）の現実を批判したり、拒否したりすることとはまったく異なっている。それはむしろアナルヒーへの意志

であり、およそ、社会一般の存立の基礎条件の否定である。

私が「普遍主義的セルフ志向」の価値への『強迫的』コミットメントとして解釈する心情はこれである。これが「政治」の世界へもちこまれる時、それは「政治的世界」を破壊し、政治そのものを消滅させようとする「反政治的情熱」の噴出となる。志水速雄は、この脅威を「真理の専制」に向かう脅威と呼んで、価値転換に直面している現代にまつわる固有の危険を鋭く解剖している。変革と解体の微妙で、しかも重要な差異を精確に解析したものである。思われるので、やや長文の引用となるが説明衍延のために借用したい。

「人間のさまざまな欲求のなかに、政治を嫌悪し、政治をできれば廃止したいという欲求と、他方、他人との共生の中で自己の卓越を示したいという政治的欲求を認めうる。反政治的欲求はどんな類いのものであれ、ある種の絶対者や真理を求めており、現実的にしろ観念的にしろ、他人との共生、他人との交わりを拒否して、孤独のなかに安住の地を見出している。これと対照的に、政治的欲求は他人との共生を前提にしており、真理ではなく他人の意見を求めている。……意見はある物、ある事柄の本質とか真理ではなく、それがどのように「見える」^{アッパレ}かということにかかわる以上、ここで求められているものは現象である。それは本性上、現世的・世俗的な性格をもつ。これと対照的に、真理が求めるものはある物、ある事柄の現象の背後に隠れている本質である。それは永遠かつ不滅であるという意味で超越的性格をもっている。……政治をどのように定義づけるにせよ、政治が多数者たる他人との共生の上にしか成り立たないものであることは明らかである。……このことはとにかく、他人の発することば、他人の意見を目当てに政治というものが成り立っているということである。つまり、政治が依拠しているのは、ある物、ある事柄Xにかんする真理xではなく、Xにかんする意見abc……である。……真理xは政治の世界に入りこんでくると、abc……と同じ単なる意見の一つになってしまう。それはabc……と同価値のものであり、

政治を承認し、他人との共生を認めるならば同価値のものとしなければならない。政治的領域において tolerance が要求されるのはこのためである。このことは日本語では寛容と訳されているけれども、原意はもともと、何ごとかに耐える力のことであり、この場合は、真理 x が $a\ b\ c\ \dots$ と同価値におかれることに耐える能力を意味している。

……（哲学的、宗教的）真理の立場からいえば、真理や正義が単なる意見の一つと見なされるのに耐えられず、政治が虚偽や謬見に満ちていると思われるのは当然である。この場合、真理 x がとりうる立場は三つしかない。第一は政治の世界を見捨て、できるだけ早く、この世からかの世へ逃げてゆくようにして孤独の生活を送ることであり、第二は、政治の世界を容認しつつ、政治に向かって正義を説得し続けることであり、第三は、政治の世界を否定し、それを破壊して「真理の専制」を打ちたてることである。第一の方法においては、真理を攻撃から守り、真理を安全な場所におくには、政治の世界、つまり、他人との共生の世界を見捨て、「神に似る」ことが必要である。真理と正義は守られるであろう。しかし同時に、真理からの攻撃にさらされなくなった政治は腐敗し、墮落する。政治において主役は意見であるが、同時にそれは真理と正義の大地に支えられているからである。第三の方法、「真理の専制」を樹立する方法もまた、政治を破壊すると同時に真理そのものを傷つけることは明らかである。ちょうど政教一致が、政治を宗教に従属させただけでなく、宗教そのものを墮落させたように。

……政治の墮落を防ぎ、それを改革すると同時に、政治をあらゆる種類の専制から守るためには、政治に向かって真理を説得しなければならない。『真理を説得する』というのは明らかに論理矛盾である。二二が四という真理は説得を超えており、真理は説得を超えて存在するからである。（ただし、これは宗教的、哲学的真理であり、現実社会にかんする実証科学からの真理は、常に相対的真理であるから、説得さるべき意見であろう。——筆者——）

説得さるべきものは意見であって真理ではない。したがって、真理を説得するというのは、真理を意見として扱い、意見として人びとに語りかけるということである。これは真理を説く人からすれば一つの欺瞞であろう。しかし、この関門をくぐることなしに政治を墮落から守ることはできない。

……（だから）私が政治の擁護というとき、それは特定の政治体を擁護することを意味しているのではなく、いかなる政治体であれ、それらに共通に見られる条件の擁護を意味している。その条件とは、多数人たる他人との共生の中で多くの意見が相互に交換され、それらの意見が tolerance をもって迎えらるる空間が存在することである。共生が人間存在の基本条件であり、政治がはかならぬこの共生の事実から生まれるとすれば、政治を擁護するというのは、この人間存在の基本的条件を守ることである。⁽¹³⁾

以上の長文の引用をあえてしたのは、戦後日本のデモクラシーが、「集団への埋没」や過剰同調の文化を「体質」としてもっている日本社会においてこそ、——それ故にこそ、普遍主義的価値へのコミットメントは、コンパルシヴな色調を帯びるのだが——著しいアノミーの亢進をもたらし、現実を変革する意志が、反政治への情熱や、シニズム、脱政治の意志に転換する契機になる、その根本の理由が鋭く指摘されているからにほかならない。アノミーの亢進は、反動的に恐怖の専政、自由の圧殺を呼び寄せるもの——アナルヒーに耐えられぬのが社会的事実の本性であるから——であるから、この問題の重要性は、おそらく強調のし過ぎということのない問題であろう。

(4) アノミーと動的均衡

さて、作田の構想にもどって、この連関を社会的概念図式で整理しておこう。前述の論旨は、結局次の命題に帰着するであろう。価値は二律背反^{アンタゴニズム}を含む双極的オリエンテーションであり、二つの方向を同時に最大限強調する

ことはできない。しかしまた、社会存立の基本条件を脅かすことなく、いずれか一方をコンパルシヴに断ち切ることもできない性質をもつものである。それは社会のサブ・システム（機能的下位体系）、あるいは個人の複数の生活構造局面に、いわば、不均等に「配分される」。かくして、経済的生産活動や職業（適応の下位体系）の領域では業績価値が優位性をもった基準となり、政治（目標達成の下位体系）の世界では献身価値が、コミュニティその他の社会的共同活動（連帯の下位体系）の世界では和合価値が、文化享受と私生活（型の維持の下位体系）の領域では充足価値が、それぞれの優位性をもった基準となり、全体社会のタイプとしては、どの価値に重心が偏し、それがどの程度ほんらい自己にとって疎遠であるはずの領域の価値にも滲透してこれを従属させているかなどの判断によって、経済優先の社会とか、政治優位の社会とか、共同体的社会とか、高福祉文化社会とかの識別が可能になる。この四者はほんらい社会の不可欠要件（functional exigencies）に対応するものであるから、当然、そのいずれかの価値を、コンパルシヴに抑圧するほどある価値が肥大する社会は、なんらかの形で、その存続の可能性に対する赤信号、すなわち危機の徴候を示すことになる。

今のわれわれの社会では、資本の論理や競争原理の過度な肥大が、環境破壊、社会的アノミー、文化の退廃といった危機のシグナルを、われわれが不感症になるのを恐れなければならぬほどおびただしく生みだしている。したがってこの種の私欲の過度の追求（営利追跡型の業績価値）は抑制されなければならない。しかしそれは、これをコンパルシヴに抑圧禁止することによってでなく、（成長経済の急激な抑止はパニック的崩壊と破局的混乱なしにしないであろうから）、他の諸価値の追求を強化することによってなされなければならない。「矛盾し合う諸力が個人を異なった方向に牽引する際のバランスが、社会にとっては『中庸』を、個人にとっては『健康』をもたらし¹⁴」デュルケームのアノミー論の筋がここに向かっていたものであったことを想起してよいであろう。デュ

ルケームの処方箋においては、同業組合のような職業団体を集団として強化することが、差し当りアノミーの緊急の治療策であった。しかし、彼の場合は、個人主義的充足価値の肥大にたいして、業績価値（職業団体の職業的側面に対応する）と、献身・和合価値（職業団体の団体的側面に対応する）へのコミットメントを対抗重力とする処方箋であった。これは個人主義の強いフランスの社会をイメージ・アップすれば背ける提案であるが、日本における資本の論理は、企業（会社）という「運命（あるいは利益）共同体＝企業一家の観念」によって、強力に和合価値・献身価値に結びついているものであるから、対抗重力はむしろ「充足価値」の強化に求められなければならない。（デュルケームの問題解決とはむしろ逆である。）前からの筆者の論旨は、日本のアノミー状況は、純粹に充足価値の肥大によるのではなく、「屈折したコンパルシヴ・コミットメント（充足価値への）」に由来するものであるという主張である。つまり、献身・和合価値が過大であるため、これにたいする対抗重力の發育不全（業績価値は真に普遍主義的業績価値とならず、グループ・ロイヤルティが生みだす競争のエネルギー、つまり集団エゴイズムが發揮されるにとどまっている。これは個人の態度としては「献身価値」優位にはかならない。また充足価値は、献身・和合価値のコンパルシヴな拒絶にとどまっているから、個人的エゴイズムの域をでないことになる。）、これが近代的、あるいは民主的の制度にさまざまな機能障害をもたらすといえる。

以上、幾分冗長にすぎる論述を、価値にかんする理論的仮説の形成のためにおこなってきたが、これらの基礎にある一般的な前提命題はこうである。社会的価値体系は常にある動的均衡の状態を保持していなければならない。それは、肥大するある価値志向をネガティブに否定ないし抑圧する中世的な静的均衡であってはならない。否、むしろ、変動期社会においては、そのような退嬰的均衡は幻想であって、それを求める行動は破局への傾向であるといわなければならない。求めなければならないのは、その価値に対抗する他の価値の強化であり、その結果として

の「動的均衡」である。

〈注〉

- (1) Smelser, N. J.: *Theory of Collective Behavior*. (会田・木原訳、集合行動の理論、誠信書房、三一—三二ページ)。
- (2) Kluckhohn, C.: "Values and Value-Orientations", in *Parsons and Shils, Toward a General Theory of Action*, p. 411.
- (3) スメルサー、前掲訳書、四二—四三ページ。
- (4) Parsons, T., *The Social System*, 1951, p. 68 ff. など。
- (5) Bellah, R. N., *Tokugawa Religion*. (堀・池田訳、日本近代化と宗教倫理、未来社)
- (6) 作田啓一、『価値の社会学』(岩波書店)、八四—九一ページ。
- (7) 京極純一、『政治意識の分析』(東大出版会)、五二—六七ページ。
- (8) 同書、六〇—六一ページ。
- (9) 石田雄、『日本の政治文化』(東大出版会) 三九—四一ページ、一〇八—一三二ページ。
- (10) 作田啓一他、『文化と行動』(培風館)、九九—一〇〇ページ。
- (11) 同書、一〇二ページ。
- (12) Grazia, S.: *The Political Community* (佐藤・池田訳、疎外と連帯、勁草書房)
- (13) 志水速雄、『政治と反政治のあいだ』(ダイヤモンド社)、一一—二二ページ。
- (14) 作田啓一他、『文化と行動』(培風館)、一〇八ページ。

三、データ解析

(1) 新潟市民の価値体系

以上の理論的前提仮説は次の質問によって吟味された。

問21. つぎに、人の生き方について、二つの対立する意見を並べてみました。あなたは、どちらの意見に賛成ですか。

- | | |
|---|---|
| 11. この世は自分ひとりが頼りだ。実力を養って競争にうち勝つ覚悟が何より大切だ。(業績) | 12. 人間ひとりでは何もできない。人生は何よりも信頼と協調が必要だ。(和合) |
|---|---|

- | | |
|---------------------------------------|--|
| 21. 他人から受けている恩義や愛情に感謝する気持が何より大切だ。(和合) | 22. 自分の信念に生きるのが大切だ。義理や人情にしばられてはならない。(充足) |
|---------------------------------------|--|

- | | |
|---|---|
| 31. 一生けんめい働いて高い地位をえたい。そのためには、たえず努力することが大切だ。(業績) | 32. あくせく働いてまで高い地位をえたいと思わない。気ままにのんびりくらしたい。(充足) |
|---|---|

- | | |
|--|--|
| 41. 会社あつての労働者、社会あつての個人だ。人みな全体の繁栄のために自分の役目を果たすことが大切だ。(献身) | 42. 世のため、人のため自分をかえりみず尽すというのは自分をあざむいている。ひとりひとりが自分の幸福を追求するのが根本だ。(充足) |
|--|--|

- | | |
|--|--|
| 51. 人の生きがいは自分の能力を十分発揮して成功をかちとったり、すぐれた業績をあげたりすることにある。(業績) | 52. 自分ひとりの業績や成功よりも、世の中に役立ったり、社会の進歩発展に役立ったりするのが大切だ。(献身) |
|--|--|

- | | |
|--|---|
| 61. 社会を変えるような大きな仕事に打ちこみたい。そのために家族や身近かな人との暖かいつながりを捨てなければならぬことがあってもやむをえない。(献身) | 62. 家族や身近かな人とのつながりを何よりも大事にしたい。それを二の次にして国や社会のことを考えても何にもならない。(和合) |
|--|---|

価値がその本性において二律背反をもったオリエンテーションであることから、質問の形式は、「たてまえ」としては双方を共に肯定できる対の命題から、「どちらかといえば」形式の選好 (preference) を求める形にした。

第2表 価値パターン・テスト項目間の相関

	1 自分が 頼り	2 高い 地位	3 能力 発揮	4 全 体	5 世の中 に	6 社会 実事に	7 調 和	8 恩 恵	9 つな がり	10 信 念	11 のん びり	12 自分 の幸 福
1. ⑫ 自分ひとりが頼り(業績)												
2. ⑩ 勤めの高い地位(業績)	.119											
3. ⑩ 生き甲斐—能力発揮(業績)	.419	.240										
4. ⑩ 全体への献身(献身)	.066	.010	-.186									
5. ⑩ 世の中、社会進歩への貢献(献身)	-.350	-.125	-.843	.242								
6. ⑩ 社会実事への献身(献身)	.184	.197	.103	.013	-.076							
7. ⑩ 信頼と協調(和合)	-.907	-.058	-.341	.096	.350	-.136						
8. ⑩ 恩恵に感謝(和合)	-.207	-.157	-.146	.223	.171	-.045	.239					
9. ⑩ 身近かなつながり重視(和合)	-.087	-.119	-.069	.162	.076	-.770	.128	.197				
10. ⑩ 自分の信念(充足)	.169	-.105	.122	-.149	-.117	.090	-.162	-.903	-.117			
11. ⑩ 気ままにのんびり(充足)	-.081	-.064	-.143	-.132	-.135	.052	-.052	-.163	.128	.193		
12. ⑩ 自分の幸福(充足)	.072	.002	.211	-.909	-.191	-.064	-.064	-.141	-.022	.154	.043	
N	27	57	34	68	58	18	69	71	73	25	36	28
第1因子負荷量	-.610	-.399	-.614	.503	.601	-.420	.588	.481	.432	-.443	.338	-.439
第2因子負荷量	-.219	.629	-.115	.281	.241	.538	.248	.262	-.492	-.351	-.648	-.345

それら是一对にして対極的に見れば、業績、献身、和合、充足のいずれかの価値のウェイトが相対的に大であると読みとれるような組み合わせ全部、つまり六対のセンテンスから成っている。各センテンスの末尾の（ ）内は、該当する価値類型を表示したものである。たとえば、第3問において、31.を選択したサンプルは、業績価値↑充足価値の二律背反構造において、業績価値優位のオリエンテーションを示したものと判断する。第2表は、一〇〇サンプルの回答結果（N欄）と、各選択肢アイテム間のクロス集計における相関度を、四点相関係数で示したものである。

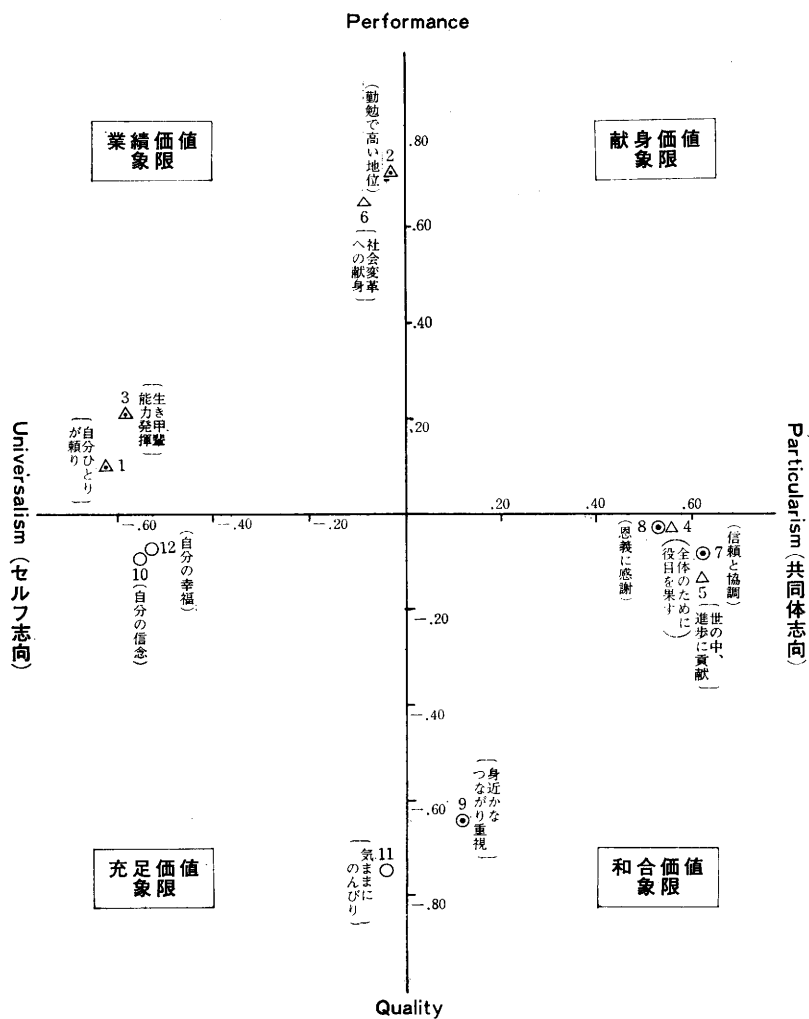
N欄の選択頻度を比較すると、11（和合）＞12（業績）、21（和合）＞22（充足）、31（業績）＞32（充足）、41（献身）＞42（充足）、51（業績）＞52（献身）、61（献身）＞62（和合）となっており、結局、例外なしに、 $61(献身) \times 62(和合) \times 63(和合) \times 64(和合) \times 65(和合) \times 66(和合) \times 67(和合) \times 68(和合) \times 69(和合) \times 70(和合) \times 71(和合) \times 72(和合) \times 73(和合) \times 74(和合) \times 75(和合) \times 76(和合) \times 77(和合) \times 78(和合) \times 79(和合) \times 80(和合) \times 81(和合) \times 82(和合) \times 83(和合) \times 84(和合) \times 85(和合) \times 86(和合) \times 87(和合) \times 88(和合) \times 89(和合) \times 90(和合) \times 91(和合) \times 92(和合) \times 93(和合) \times 94(和合) \times 95(和合) \times 96(和合) \times 97(和合) \times 98(和合) \times 99(和合) \times 100(和合)$ の順位で多数傾向が形成されていることがわかる。ナショナル・ゴールの喪失と、大衆社会的な消費感覚の拡張によって、戦後世代を中心に、私的な充足価値の著しい肥大があると一般にはいわれているが、少くとも新潟市民においては、まだ共同体的価値パターンである個別関係主義、和合同調主義の圧倒的な優位があると断定できる数値を示している。

次に、各選択肢標識間の相関を見ると、多くは、12、31、51間の各相互相関のごとく、同一価値パターン標識の自己内相関（第2表の相関行列内の三角形

の枠で囲んだ部分)はプラスの相関となっている。しかし、例外は、61項(献身価値)の41、52項にたいする関係に現われている。これらはすべて献身価値の標識として設定した項目であるから、ほんらいすべてプラス相関が期待されていた項目である。61項は、社会変革運動への献身の価値づけであり、41、52項はそれぞれ、全体への献身、世の中、社会進歩への献身の価値づけである。それらはすべて、「政治」目標達成機能のウェイトづけであるという点で、共通に献身価値を示す。しかし結果はこの61項が41、52項とマイナスに相関して仮説を裏切ることになっている。仮説に対するこの不適合は、かえって新潟市民の価値意識に、日本社会の価値パターン特性が非常によく反映されていることを示している。というのは、前述のように、日本社会の献身価値は非常に強く和合価値と結びついているものである。世の中や所属集団への献身は、「和」の精神や、同調主義的一体感によって強まる連帯のエネルギーを丸抱えにして共同目標の達成に注入する形になっている。だからそれら(41、52項)は、21、11項(恩義に感謝するのが大切。信頼と協調が大切。)のような和合価値の項目と、かなり高いプラスの相関をとることになる。(第2表)これに反し、同じ献身行動であっても、「社会を変えるような大きな仕事」への献身は、むしろ、一般風潮や社会・集団の現体制に対してはノン・コンフォーミティ(非同調)であるから、大勢に抗し、かつ孤立して、その能力とエネルギーを大いなる営為(performance)に投ずることというイメージを生むものになる。だからそれは、むしろ「個人主義的」な業績価値と近似した態度と受けとられたのであると解釈される。従って、新潟市民の価値体系は、和合価値およびそれと結びついた献身価値(61項を除く献身価値標識41、51項)の圧倒的優位によって特徴づけられる(それらはすべて約60パーセントから70パーセントに及ぶ選択頻度をえている)と、いっておくことが差しあたり可能である。

本稿の分析ではこの価値テスト・アイテムをもとにして、サンプルを四つの価値志向類型に帰属させたカテゴリ

ーを使用している。それ故、ここでこの類型設定の妥当性根拠を吟味しておきたい。第2表の相関行列を、セントロイド法によって因子分析をおこない、第二因子まで抽出した結果が、第2表の下の欄に表示した因子負荷量である。これは軸回転前のものであるが、「単純構造」をめざして、グラフ上で直交回転（プラス31度）をおこなった結果が第3図の因子布置図である。図上で明瞭に見うるところであるが、第一基軸は、「信頼と協調が大切（和合）」、「世の中に役立ち、社会の発展に貢献（献身）」などが高いプラス、「自分ひとりが頼り（業績）」、「自分の信念に生きる（充足）」などが高いマイナスであるから、これは明らかに **Collectivity** → **Self** の分極基軸である。共同体志向と個人主義的価値志向の対立線にほかならないが、ここで特に21、11の和合価値アイテムと、41、52の献身価値アイテムが緊密に結びついていることが示されていることに注目してよいであろう。第二基軸は、「一生懸命に働いて高い地位をえたい」（プラス）、「気ままにのんびり暮らしたい」（マイナス）の対極軸であるから、これは明らかに **Quality** → **Performance** 軸である。この二つの軸が直交する座標の四つの象限が、それぞれの価値パターンをつくるというのが理論的仮説であったから、業績、和合、充足の各テスト・アイテムはこの仮説要件を充たしているといえる。（テストが二者択一形式であるから、当然の結果として、相互に極度に大きなマイナス相関が各項に一つずつ含まれることになる。そのため、第一、第二因子の相互独立がかなり大きく表現され、同一価値パターン標識の諸項が「異なった次元」に二分割されているが、それでもそれらが予想された該対象象限の中に収まる形を見せているから。）そしてここでも献身価値は仮説不充足の形をとる。（第一象限が空白）、この不適合の意味は、前にのべた解釈で説明できるものであることはいうまでもない。しかし、ここに現われた布置図は、和合価値の（属性本位側面でなく）コレクティヴィティ志向側面の強いアイテムと、業績価値の（セルフ志向側面ではなく）パフォーマンス志向側面の強いアイテムを加算して、献身価値の類型設定をやること、それほど不当で



第3図 価値志向因子布置図

〈第1—第2因子、直交回転後〉

表3 価値志向タイプの相互関係

	1.業績価値	2.献身価値	3.和合価値	4.充足価値
1.業績				
2.献身	-.46			
3.和合	-.25	.15		
4.充足	-.01	-.40	-.27	

i 項目間の相互関係の解釈

テゴリー間の四分相関である。たとえば、この表の中で第1項と第40項との相関が、 1.08 であるということは、後の第5表中の四カテゴリーへの度数分布の結果、政治家は私生活が清潔であるべきだという政治家イメージが、相対的な傾向として、二〇才代の若年層に抱かれることが少いということが表現されているということである。つ

はないことを示す形であるといつてよいであらう。

六対の選択肢に関して、選好の与えられた価値パターンに+1点、拒斥されたものに-1点を与え、ある価値パターンの総スコアがプラスとなったサンプルを当該価値志向保有者に入るものとした。その結果、和合価値タイプの者、76、献身価値51、業績価値33、充足価値25、という類型区分をえた。一人のサンプルは平均して二つ程度の類型に同時所属する。その重なりを相互の関係で見ると第3表のごとくである。

献身と和合のみがプラス相関を見せているから、ここでもこの両パターンの重なりが顕著であること、全般的に見て、個人的セルフ志向と共同体志向との分極化が基本の分化、対抗線であることが判明する。

(2) 新潟市民の政治意識——その構造分析——

以上の準備にもとづいて、属性分類変数、28項、および政治的態度変数34項、計62項総体の共変関係の解析に入りたい。

これを相関行列によって一覧したのが第4表である。既述のごとく、これはすべてカ

まり、第5表で見うるように、三〇才以上の年齢層では、「清潔であるべき」とする意見が、その他の意見の八倍にも及ぶような圧倒的多数意見であるのに、二〇才代では二倍程度となるにすぎない。この傾向差が、「二〇才代」と「清潔イメージ」の両標識間の相関 -0.28 と表現される。これは、名望家政党の体質に対応する「士大夫の感慨」ある政治家というイメージ、つまり、無為にして化す有徳の士とか、家産を傾けて国事に奔走する無私の人といった政治家イメージが、高年齢層には残存しているが、若年齢に急速に消滅しつつある事実を反映していると読みとれる数値であろう。前節のテーマであった価値パターンの中では、「和合価値」が、この「清潔な政治家イメージ」と 0.20 のプラス相関を見せている。これもこのイメージが、名望家政党タイプに対応した政治家像であることを証明しているものであろう。この解釈を補強するいっそう興味ある事実、この項が「政治家はその政治目的を実現するためには手段を選んではならない」(第41項)という意見と、 0.13 にすぎないけれどもプラスに相関していることである。その原相関表は第6表のようになっていいる。つまり、このいわばマキアヴェリズムの傾向のある政治イメージの保有者が、比率からいってかえって政治家の私生活の清潔を要求する度合いが多いことを示している。極端にいえば、政治家に清潔を求める者が、かえって、政治目的のためには、あくどいことも敢えてやるのが政治家だと思っている傾向が強いことになる。矛盾のように見えるこの関連が、むしろ、上記の解釈を補強する。というのは、まさにこの態度が、名望家政党(責任政党でなく)の体質が強い政治文化の下で培われた政治家イメージにはかならないからである。無為にして化す有徳の士(私生活で無私無欲の人——閉鎖的共同体の対内道德において高潔さをもつ人)が、政治活動(地域・同業団体その他閉鎖共同体の庇護者として、多分に利益誘導的に動く活動)において、大いにマキアヴェリズムを発揮する——対外道德の低位——形を好ましいとする政治家イメージがあることを示す関連が即ちこの結果だからである。この道德の二元性(Binnen-moralと Aussen-moral)の

第4表 原 相 關 行 列

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																
	20代	30代	40代	50代以上	中等学歴以上	商工サービス 営業	専門・技術 管理・技術	労務	(年収入) 150万以下 200万以上		出生以来定住	定住5年未満	県外出身者	(階層意識) 上向 下向		本庁・入舟	閑屋・内野	沼垂・鳥屋野	沼垂・松浜	職業事務																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																
1. 20代	- .37																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																			

表5 第1項 × 第40項の四分相関

	20才代	その他の年齢層	計
政治家は清潔であるべき	15	69	84
その他の意見	8	8	16
計	23	77	100

表6 第40項 × 第58項の四分相関

	政治家は手段を選ばず	その他の意見	計
政治家は清潔であるべき	35	49	84
その他の意見	4	12	16
計	39	61	100

が、閉鎖的共同体の特性の一つであることはM・ウェーバーの指摘したところであつたが、この連関はそれ故、新潟市民の意識態度にまだかなり共同体的性格（ムラの自治意識タイプ）が残存していることを示しているものであるといえる。

II 一般因子解法（General Factor Solution）の適用

第4表に現われている一、八九一個の相関係数を手がかりにして、以上のような意味の解釈を進めてゆくならば、政治的態度の全体的関連の特性を徐々に浮きあがらせることができるであろう。しかし、それは極端に膨大な作業になる。またその課題は、この相関マトリックスに現われている意味連関を説明する媒介要因のありかた（潜在構造）を探ることになるから、この相関行列を圧縮して、これをより少い次数の因子負荷行列に変型する方法が、この作業のきわめて効率的な代替作業になることも明白である。

既述のごとく、本稿はこの因子分析に際して、サー斯顿によって第二次の（second-order）因子分析と呼ばれた方法を適用し、一般因子群因子の複合解を試みたものである。この方法に関しては、数年前二つの小論稿⁽²⁾によって、社会意識のデータを、「構造―機能分析」タイプの理論検証に使う場合、これが有効なのではないかという筆者の意見を発表しておいたのであるが、その後、大学紛争に遭遇して、この試論めいた提案を、今日まで実質

化する機をえないます。ごしていたものである。この意図で実施したほかの地域住民意識の比較調査も、現在集計分析中であるので、この方法の有効性についての経験的吟味や、一層ベターである他の分析技法への転換も、この機に模索する意図をもってやっているから、本稿もまた、構造―機能主義的な社会学の、理論と調査の統合を追求する課題のワン・ステップをなしているものといえる。

いづれにせよ、この方法は二つのレベルの因子分析を組み合わせ、多群解法 (multiple-group Method) で単純構造 (simple structure) を求めるところからえられる各次元の相互独立性を最大限表現する利点、いいかえれば、共通 (群) 因子の布置的不変性を確保する利点と、斜交単純構造の際の各因子軸の相関から、一段高いレベルにある共通因子を抽出し、それにより、全アイテムを一貫して支配する一般因子をも検出できる利点を、ふたつながら確保しようという方法である。したがって、この結果は、斜交単純構造の各基軸間の重なり (相関) 部分が一般因子として表現され、その部分を差し引くことによって、斜交の群因子構造が直交に修正されて表現されることになる。だから、たとえこの一般因子の因子分散は量的に小であっても、これは、質的な意味の観点からいって、トータルな一般傾向を説明する基本の分極性基軸であり、相互に独立の各群因子に対しては、一般性レベルのハイアラキー構造において、支配的上位レベルにある因子である。

III 因子の次元構造

本稿では、第4表の原相関行列にクラスター・アナリシスを加えて、前記の六二変数を四つのグループに区分した。第一次の因子分析には「重グループ法」を適用した。第二次の分析を経て、えられた最終の結果が第1表の因子負荷行列であり、これを、一般因子をベースにする形でグラフ上にプロットしたのが第4図から第6図までの因子布置構造図である。

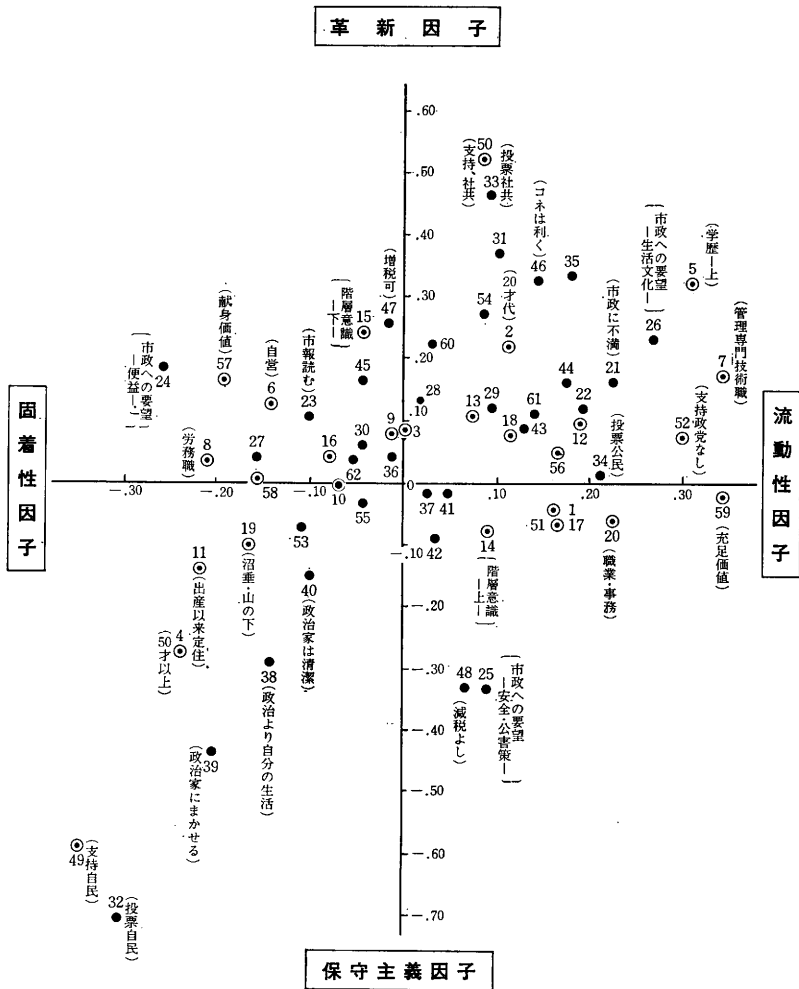
まず抽出された一般因子の性質を吟味するため、斜交単純構造における各因子軸間の相関をみると、その状況は

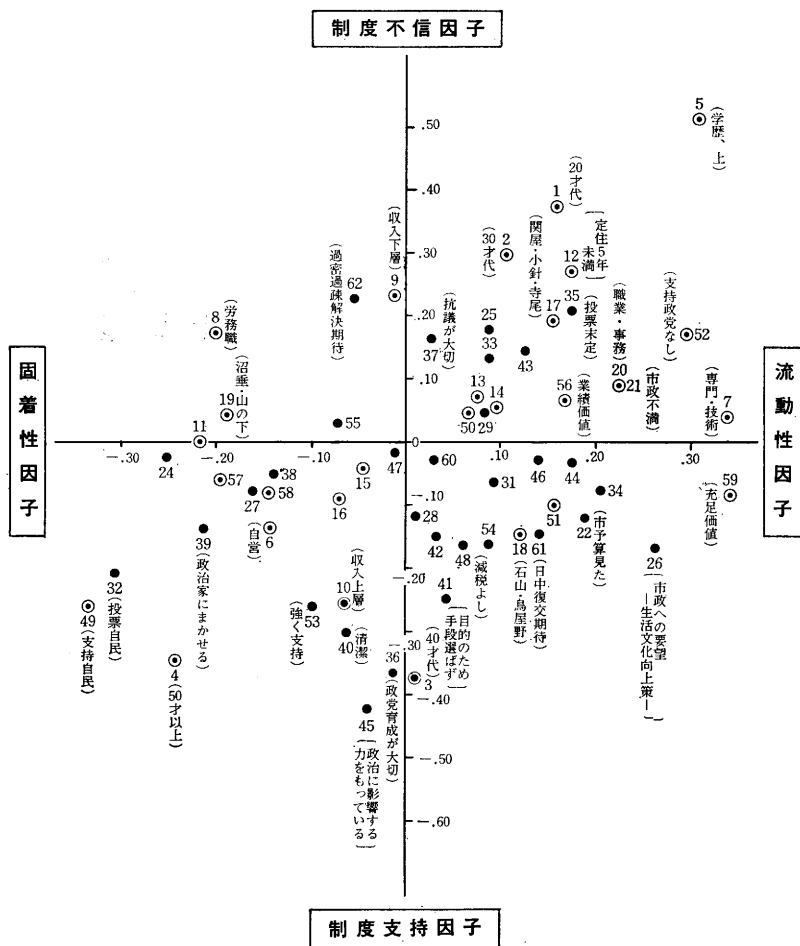
表7 因子軸相互の相関と第2次共通因子ベクトル

	第1因子軸	第2因子軸	第3因子軸	第4因子軸		第2次共通因子量
第1	1.0				第1因子軸	.379
第2	.083	1.0			第2因子軸	.182
第3	.290	.172	1.0		第3因子軸	.705
第4	.042	-.041	.031	1.0	第4因子軸	.144

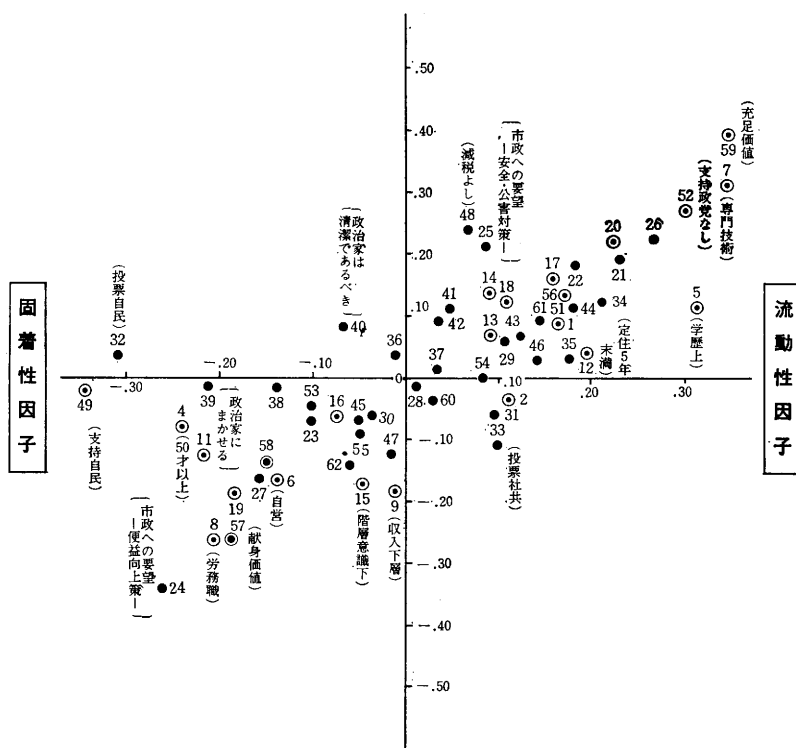
第7表左の相関行列で見られるものであり、これを因子分析してえられた第二次の共通因子ベクトルは第7表右のものであった。

つまり、斜交単純構造においては、第3因子軸の他の基軸との重なりが最も顕著であり、第1因子がこれに次ぎ、他のグループと無関係に独立している性質、つまり特殊因子に近い性質のものが第4因子であったことがわかる。それ故、一般因子の意味の読みとりは、先ず第6図（一般因子と第3因子の交差布置図）に即してやるのが有効である。プロットされた点の全体の配列は比例型の配列であるから、この結果からも、一般因子と第3因子の親縁性が読みとれるが、この並行関係から偏倚している諸標識が、第3因子と区別された一般因子が何であるかを推定するのを援ける。それらはプラスの方向では、⑤ 高学歴、⑫ 定住5年未満、③ 投票政党未定、⑪ 投票政党に変更あり、② 年齢30才代、④ 政治にコネが利く、などが顕著であり、マイナス方向では、④ 支持政党自民、⑫ 投票自民、④ 年齢50才以上、③ 政治のことは政治家にまかせよ、③ 政治より自分の生活が大切、③ その政党（支持する政党）を強く支持、⑪ 出生以来定住、などが顕著である。これらは、知的水準、政党支持の流動性↑↓固着性、地域的流動性↑↓定着性、批判的態度↑↓無批判的白紙委任態度の複合的分極化を示し、一般的に有権者の政治的主体性形成度の差異を示す因子であるといえる。（なお、④ 政治にコネは利くという意見は、この調査ではたとえば、④ 政府は責任を果していないと70.29、





セルフ志向因子



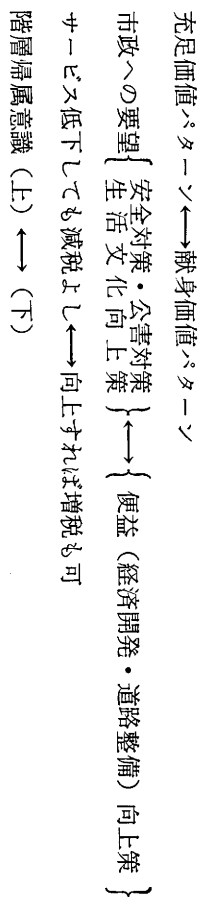
共同体志向因子

第6図 因子負荷交差図
(一般因子—第3因子)

㉑ 市政に不満とは 0.18 とプラスに相関し、㉒ 政治のことは政治家にまかせよとは -0.27、㉓ 政治より自分の生活が大切とは -0.17 とマイナスに相関しているから、この項は、現実政治に対する批判的態度を示す意見として解釈される。

とくに地域的定着と政党支持の固着性が同一方向で結びついていることは、地縁血縁のしがらみが、有力者への下駄預け的信託の基盤となる政治意識、つまり、未成熟な市民性がはつきりと一方にあり、（これが自民党支持の有力基盤であることも、この布置図で証明されているが、）これと対立する形で、流動的、浮動的、批判的態度があつて、これが必ずしも社共支持の態度でなく、むしろ、支持なし、変更あり、投票未定の態度であることが注目されてよいであろう。つまり、イデオロギー因子が一般因子となることなく、伝統型とインテリ型根無し草傾向との対抗図（内的ストレイン構造）が、一般因子の座を占めているのが、このデータの著るしい特徴である。この点に留意して、この一般因子は、流動性↑固着性の因子と命名されるであろう。

これに対し、第3因子の方は、



などの分極化をとくに説明する因子であるので、「個人的セルフ志向 ↔ 共同体（collectivity）志向」の因子と命

名できるものであることが判明しよう。

続いて第4図を見れば、第1因子がイデオロギー因子であること、即ち、革新支持↑↓保守支持の政治的対抗傾向の説明因子であることは一目瞭然であろう。次に第2因子を吟味するために、第5図を見ると、これは先ず客観的要因でいって「世代因子」であるが、主観的態度の説明因子としては、「政治的制度不信↑↓制度支持」の因子であることがわかる。というのは、この第2因子に関しては、先ず学歴、世代（20・30才代↑↓40・50才代）、収入（下↑上）の分極化が顕著に表現されており、若年層が学歴は高く収入額が低くなる傾向をもつのは自然であるからであるが、同時にそのマイナス方向、つまり高年齢世代の方向に④⑤自分は政治に影響を及ぼす力をもっている、②③市報よく見る、③⑥政党育成が大切、⑤③その支持政党を強く支持、など、政治に強いかかわっている参加感覚と制度支持の態度が見られ、逆のプラス方向、つまり若年層の方向に、③⑦政党など頼りにならないから抗議運動を盛りあげるのが大切、④③政府は責任を果していない、⑥②支持政党なし、⑤⑤投票未定、など議会制政党不信や政治からの疎外を示す項目が見られるからである。いまは意識態度の次元構造の解明が課題であるので、因子の名称としては、主観的態度因子の名称をとり、この第2因子は、「政治的制度不信↑↓支持の因子」としておきたい。

第4因子はほとんど特殊因子であり、共通因子としての重要性は乏しい。これが公明・民社支持の因子であり、この層が、収入下層と定住5年未満層に傾斜していることを示している。公明・民社支持は七パーセントにすぎないから、いわば都市生活の底辺に片寄って、少数市民層のこの支持態度が形成されていることを示している。

以上の四因子（群因子）の読みとりと、これらの一般因子に対する重なり、ないし並行関係の傾向判断から、形式的には、新潟市民の政治意識の多次元構造は、一応次のごとく構成されているといえよう。



(3) 総合評価——結論——

第4因子は特殊因子の性格の強いものであるからこれを除き、他の3因子と一般因子との複合された負荷状況が、各変数についてどう形成されているかを検討し、その布置構図の意味を解説することが、新潟市民の政治意識の「質」を評価したり、その変化動向を予測したりするのに有効な手段となるであろう。前節できてきた各因子の名称をふまえ、一般因子との交差布置構図である第4図、第5図、第6図を使用して、この「総合評価」を試みて本稿の結論としたい。

質の評価は当然、「発展モデル」を仮定し、それに照らして「質」と「程度」を測定することの上にたてられる。『政治発展論』という好著を世にだしている白鳥令は、その中で、伝統（停滞）⁽³⁾ 的社会を支える大衆の人格に創造性が欠けている事実の中に、それらの社会の停滞の大きな原因があるという視点をヘーゲン（E. E. Hagen）に拠って強調している。創造性の基礎は知的能力であり、それは社会的行為の型としては、先ず変化と新しい経験の積極的受容の態度となつて現われる。白鳥は、この心理的可動性に現実社会の可動性がともなわない場合、この革新的態度が「程度」の問題を越えて「限度」の問題となり、ラーナー（Daniel Lerner）のいう「コミュニケーション」の発達によるエンパシー（empathy）増大の危険性⁽⁴⁾が生ずるという重大な指摘をおこなっている。これ

は、先に「価値体系」の節で論じた一般的な社会的アノミーの問題に、特殊政治的態度の面に対応している問題であるので、政治的態度の共変関係を分析するこの段階でのデータ解析にはとくに重要な理論的仮説になる。われわれのデータの一般因子（流動性―固着性）は創造性の程度にかかわり、第1因子（保守―革新因子）は、現実政治の可動性の程度を、支持態度の面から推定させる手掛りとなるものであるし、第2因子（制度支持―不信の因子）は、革新的態度の「限度」の問題を考察する際の手がかりとなるからである。

ⅰ 市民性の成熟ポテンシャルと現実政治の可動性

市民性の成熟度を創造的性格の視点から見ようとする白鳥の論旨は次のごとく説明される。まず、創造的人格の中心特性は、ヘーゲンによって、(1)業績を求める高い欲求、(2)自治を求める高い欲求、(3)秩序を求める高い欲求、(4)さまざまな現象を無秩序なものと考えず、概念的に理解しうる一つの体系だと考える感覚の四点にあるとされる。業績を求める高い欲求をもつ人間は、これまで慣れ親しんできたものと違った新しい不規則な現象に直面すると、かえって大きな喜びを感じる。それが自己の理解を広め、自己の能力を拡張する機縁となることを予感するからである。また、「自治に対して高い欲求をもち、しかも秩序に対しても高い欲求を有している人間は、自分の関係している領域で、たとえ混乱が生じてもそれを不快だとは感じない。というのは、こういう人間は、世界は秩序の整った場所であり、いかなる表面的な混乱の中にも、複雑だが満足すべき秩序があるはずだと感じていて、喜んでその混乱を許容するからである。……これまでに彼が理解していたものとは違った現象が生ずるのをある意味では望んでおり、そのためにそれに敏感に反応し、注目する。……(要するに)それらの新しい混乱のうちに新しい秩序を発見して、自己の理解を拡大できるのであろうと考える。彼は変化と新しい経験を積極的に迎えるのであって、だからこそ創造的なのである。⁽⁵⁾」

これに反して、「非創造的人間は、これまで彼が理解していた図式では説明されないいかなる現象も、これを見

ようとはしない。……彼は新しい問題に直面してみずから決定しなければならないという事態を避けるために、集団に埋没し、集団のコンセンサスの中に安住の地位を見いだそうとする。また、みずから決定するという責任を負わないで済むことから、既存の権威に従うことに安らぎをえ、このために、伝統的社會の権威主義的階級内で自分に与えられた服従者としての地位を守ることに満足する。……（このような、自我防衛の心理は）彼を、明確に規定された階級構造を好み、（一方では）だれかに盲目的に服従するか、（他方で）だれかを絶対的に服従させるかすることで安らぎをうる人格へと育ってゆく。（だから）この種の人格は、非創造的という消極的な名称ばかりでなく、権威主義的という積極的な名称で呼ばれる⁽⁶⁾ことになる。

以上の論旨は、成熟した市民の民主的資質とは何かの問いに答えた数多くの論評に共通に見られる観点であり、E・フロムの「生産的志向の性格」⁽⁷⁾、マズローの「精神的に健康な人間」⁽⁸⁾、アイゼンクの「軟心型」⁽⁹⁾、アドルノの「民主的性格」⁽¹⁰⁾（権威主義的パーソナリティに対する）などを想起することも可能であろう。いずれにせよ、これは民主的社會の政治主体の市民性成熟度の、かなり普遍性をもった評定基準としてよい観点である。ところで、伝統的社會、あるいは後進型の社會でこの資質が、その一部で急速に育ってくる⁽¹⁰⁾とき、社會は一つの危険に直面しなければならない。それが「エンパシー増大の危険」と呼ばれたものにほかならない。

エンパシーとは、「自分にとって好ましい属性を外の対象に付与したり、対象が有する自分にとって好ましい属性を自己に付与したりして自我を拡大しようとするメカニズムを意味するが、このメカニズムは社會の変革のためには不可欠の要素である。……この心理的可動性は、社會的可動性がともなえば、政治的現状を、現行制度内で変革しようとする革新的態度の『程度』の問題となるであろう。それは政治の流動的發展のサイクルを早め、政治的安定に寄与するであろう。だが、人びとのこの心理的可動性に、現實社會的可動性がともなわない場合には、そ

れは、革新的態度の『程度』（どれだけの票が現状の変革を期する政党に投ぜられるか）を越えて、『限度』（どれだけが、政治的社會の廃棄を期する党派に投ぜられるか）の問題となる。……ラーナーは、エンパシーが過度に増大する危険性を主として低開発諸国について指摘したのであるが、……先進国では、マス・メディアによるコミュニケーション（新聞・テレビのみでなく、人びとの大量移動なども含めて）は、後進国とは比較にならぬほど発達しているので、知識人のみならず一般大衆もまた、エンパシーを増大させる方向へと強く刺激されており、問題はより深刻になっている。⁽¹¹⁾

白鳥は、問題整理のこの筋道に立って、「現代社会における民主政治の問題の一つが、人間交流を含めたコミュニケーションの発達によって刺激されているこのエンパシーの増大を、どのようにして、革新的態度の『限度』の問題にまでもちこまないで処理するかという点にある」という明確な指摘を行なっている。⁽¹²⁾ われわれのデータのうち、第4図は、明らかにこの問題が重要な問題となる現実の情勢を如実に示している。既に見たように、一般因子（流動性―固着性）はそのプラスの方向に、職能的変数にあつては、管理・専門技術、ホワイトカラー、高学歴などを、地域的変数において、関屋・坂井輪・内野や石山・鳥屋野などの新興住宅地的地域と定住年数5年未満とを、政治的態度変数において、支持政党なし、その他、現状批判や現実不満の諸態度を表現し、地域的、職業的、心理的可動性（モビリティ）の大きな傾向を説明する一般的因子になっている。したがって、第4図の第一象限は、「流動的革新」の性格をもつ諸属性や諸態度がプロットされた空間なのであるが、この中で、⑤支持政党社会・共産と、③投票―社共の二項目が、この流動性因子（一般因子）に關してほとんど有意性のない0.1以下の因子負荷にとどまっている点が重要であると思われるのである。現実政治の可動性を、議會制デモクラシーの現行制度内で招来する正統的なルートが、与野党勢力の消長による「政權交代」であることはいうまでもないが、野党の主力

である社・共両党が、住民の流動的、変革志向的部分の一義的支持を必ずしもえておらず、この部分の支配的傾向が「支持政党なし」傾向であることがはっきり現われているからである。もとより、この部分の傾向的支持が公明・民社支持にもあることは幾らか証明されている。しかし、公明・民社支持は、新潟市のこのデータの都合、両党を合しても七パーセントに過ぎぬから、これは現実政治の可動性を証拠づけるものにはならない。これに反して、「固着的保守」を示す第三象限を見ると、③政治のことは政治家にまかす、④支持政党―自民、⑤投票自民などが、社共支持などの場合と異なっており、まさに固着的保守そのものを具体的に代表する態度となっており、いわばこの象限の正面高座に鎮座している。この布置構図は、少くとも住民の政治意識から見る限り、政治の勢力配分の現況が変化する可能性が極めて低いことを示すといわざるをえない。こうして新潟市民のうち、教育の水準が上がり、移動が頻繁になり、仕事にはいっそう知的にかつ自律的にかかわるようになっていっている部分には、「エンパシー」が増大し、現実変革への志向が「限度」の問題に逸脱する条件が、かなり確実に蓄積されているといつてよいと思われる。

この「逸脱」の各種は、この因子布置構図にプロットされた幾つかの態度標識を吟味しながら、たとえばマートン(R. K. Merton)説の逸脱の諸類型に該当する態度傾向の存在をつきとめてゆくことで確認してゆけるであろう。なぜなら、「保守永久政権」の状況下において、生産優先から福祉優先への転換といった政治の志向目標の転換が、「制度化された手段」(ここでは政権交代)によって成就される展望をもちえない市民の場合には、それに由来する逸脱は、何らかの意味で「目的―手段の不調整」にかかわり、そのいずれかの放棄や侵犯を含む行動(ないし態度)となるからである。しかし、このデータが示しているマートン図式の逸脱態度は、「脱政治的態度」、「反政治的態度」の各種であり、単なる「政治的無関心」ではないことを予め指摘しておくことが必要である。第5図

によって、一般因子と制度不信—制度支持因子の交差配置を見て頂きたい。政治的無関心を反映する態度標識である③政治のことは政治家にまかせよ、とか、③政治より自分の生活が大切などの態度は、③その政党を強く支持している、とか、④自分は政治に影響を及ぼす力をもっているなどの項と同じく、第三象限（固着性—制度支持象限）に入っている。逆に、⑦政党など頼りにならぬから抗議が大切とか、⑥支持政党なし、⑤投票未定などが、対極的な態度として、第一象限に入っている。このことは、議会制不信や支持政党なしが、政治的無関心からきているのではなく、逆にむしろ強い関心か、あるいは政治への過剰要求からきている態度であることを示す。これが、この結論的解釈を、政治的無関心の問題としてでなく、「エンパシー増大の危険」社会的アノミーの症候の文脈でつけようとする理由になる。

II エンパシー増大の危険性 マートン説の「文化的目標」と「制度的に規定された手段」という一般概念を、わが国現今の政治状況に適用して具体化すれば、目標はこの「政治の価値（目標）転換」であり、制度的手段は「政党の育成」あるいはそれによる「政権交代」であろう。アノミー症候としての逸脱（deviance）は次のように分類される。

	(逸脱タイプ)	(目標)	(制度的手段)	(該当する政治的態度)
(1)	刷新型	+	-	反政治的心情（政治不信）
(2)	儀礼主義型	-	+	代理希求的幻想
(3)	隠遁型	-	-	脱政治的態度
(4)	反逆型	+	+	未開拓な可能性を探究する態度

(1) 刷新型（innovation）は、目標の過度の強調があつて、しかもそれを達成する合法的手段に接近することが困難なために、制度を侵犯するタイプである。今日の政治行動でこれを具体化しているものは、代議制を「偽装せ

る巧妙な独裁制」ときめつけてこれに拒絶を示し、暴力革命を正当化する各種ラジカリズムである。本調査では、この種の暴力的ラジカリズムを示す標識を設定してはいないが、③政党など頼りにならないから政治に抗議するのが大切、の項目がこの図（第5図）の第一象限にあり、①20才代、②30才代、⑤高学歴、⑫定住5年未満などの属性が同じ象限（流動性Ⅱ制度不信）にあることから、エンパシーが増大して、これに共感するようになる傾向がこれらの層に形成されているという推測を可能にする。

この態度の危険性を的確に分析しているのが、前に引用した清水速雄の『政治と反政治のあいだ』である。この視点の的確さは、政治的欲求と宗教的情熱（Ⅱ反政治的心情）を峻別することの必要を、立論の基底に据えているところに由来している。およそ、「私」に対する問いかけ（人間としての自己証明——self-identityの確認）においては、二つの形式が可能である。「私は何であるか」と、「私はどこにいるか」が即ちそれである。現代の危機は、この二つの問いの境界線が次第に曖昧なものになりつつある点にある。それは、「脱産業社会」(post-industrial society)への傾向というべき社会の今日の変貌と密接に関係している。「ゆたかな社会」、余暇の増大する時代、知的職業、サービス経済が拡張する時代には、自らを社会的平面で identify することに困難を感じる人びとが増大するという重大な変化が生ずる。失業者、退職した老人、職につく前の青年や学生は、昔からこの層を代表した原型であったのだが、同時に、本性上、富の獲得行為に直接結びつかない行為に従事する人びと（芸術家、文学者、詩人、哲学者、評論家、教育者、宗教家、その他のサービスの職業）がその仲間に入り、他方、家庭内の婦人群がそれになる。——学生のゲバルトに対して、屈折した心情的な共感を寄せた者の多くがこれらのグループに属していたという指摘も可能である。——近代の社会は一切の価値の源泉を労働に求めてきた。そこから、われわれが「職業Ⅱ富の獲得行為」に、また、社会的分業の一機能に結びつけて、「私はどこにいるか」に答えることで、自

己を identify する方法が一般化したといえる。しかし、現代人が人間としての自己を主張し、自分を証明することとは、従来のように職業によっては、あるいは労働価値説によっては次第に不可能になる。その方式は近代産業社会の歴史的産物であったと考えなければならない。労働から解放されて余暇に悩む人間、物的財貨を生産せず、瞑想にふけり美を創造する人間は、何によって自己を identify すべきか？ 確かにこれを探究する「仕合せな」人間は少数派である。しかし、明日は彼等が多数派となるであろうから問題は重要である。⁽¹⁴⁾

「私は何であるか」という問いは他者との隔絶において「私」自身の内部に向けられており、「私」の何たるかを決定する尺度はある種の絶対者であり、「永遠なるもの」である。「私はどこにいるか」という問いは逆に他人との結びつきを前提とし、「私」の外部に、現世的な他人に向けられている。「政治的空間」は、この「私はどこにいるのか」の問いを、他人との共生関係を規定するシンボル空間において問い続ける結果として成立する。政治過程は他者の象徴的意味環境を、自分の意味環境に積極的に一致させる説得、およびそれが失敗する場合の妥協の形成から成っている。従って政治過程は、多数個人の独自の意味環境の固有性（差異）承認の上に立ったコミュニケーション過程である。ところがコミュニケーションにはこれと異なったいま一つの種類がある。それは理解でなく共感（sympathy）をめざすコミュニケーションである。それは単に意味環境の一致を求めるのではなく、意味環境を成立させ、支えているより根源的な体験や生命の同化を求めるコミュニケーションである。（暴力は共感をめざすコミュニケーションの倒錯した形式といつてよい。）⁽¹⁵⁾ 共感を求める欲求は、「私は何であるか」という、ほんらい他者と隔絶した内面で、絶対者とかかわる中でえられる答の合致を、つまり宗教的体験の合致を、現世的共同関係、政治的世界に求めようとする情熱である。これが「政治」に対する不当な過剰要求であり、この要求のもち込みが、政治的（社会的）世界そのものの存立条件を破壊する契機となるものであることは既に指摘したところである。

「……マルクス主義はほんの歴史哲学として、人びとにその位置（私はどこにいるか）を知らせるものであった。……しかし、知らず知らずのうちに、それは『私は何であるか』という問いにも答えるふりをしはじめた。背教者とか転向とか異端というような宗教上の用語が無造作に使われても、そのことに疑問さえもたれていない。このことは通常いわれるように『神々の死』と深い関連がある。……私たち現代人は『神々の死』と『イデオロギーの終焉』によって、いわばダブル・パンチを食らっている。しかも、『私は何であるか』という問いと『私はどこにいるのか』という問いは依然として曖昧なままに融合し、満足すべき返答を待ちわびている。私たちは先ずこの二つの問いを区別し、その上でそれぞれの問いに答える長いつらい努力を払わなければならない。⁽¹⁶⁾」ひっきり、この長くつらい努力を省略して「短絡」する行動と心情とが、この型（刷新型）、つまり反政治的情熱に由来する政治不信を生みだしているものであるといえる。

(2) 次に儀礼主義型(Critialism)は、高い願望を放棄したり、水準低下させたりしてフラストレーションを回避する型である。現在日本の政治状況では、「保守永久政権」の現実を是認ないし「あきらめ」るところまで、「革新的態度」の「程度」を低下させ、議会制デモクラシーの形式を熱心に擁護する態度がこれを代表するであろう。今日では、社共など「革新」政党が既得権「保守」の政党になっているから、自民党にこそ社会「変革」の政策を期待すべしとする「革新」主義者の態度もこれに入るであろう。現首相田中角栄が新しい自民党総裁として登場したその時点で行なわれたのが本調査であったから、このデータでは、これに対する「代理革新政権」幻想というべき態度が、これらを典型的に代表する形で現われている。第4図において、⁽¹⁷⁾田中新総裁の登場に、新しい政治への転換を期待するという態度アイテムが、社・共支持態度とほぼ同じ方向の第一象限内の位置にきていることがこれを立証する。⁽¹⁸⁾過密過疎問題の解決、⁽¹⁹⁾日中国交回復というこの内閣の目玉商品であった課題の達成を期待する

態度が、傾向として、保守支持者より革新支持者により多くある期待であったこと(両アイテムが第1因子についてはプラスの負荷になっている)もこの幻想の存在を示している。スメルサー(N. J. Smelser)によると、このような願望充足幻想にもとづくブーム的支持は、「クレーズ」(Craze)の一種であるから、これは容易に「パニックス」に落ちこむ集合行動(Collective Behavior)、すなわち逸脱行動にはかならない。田中内閣の支持率が、当時の六二パーセントから、今日二七パーセントに急落している事実を報じた最近の世論調査も、この解釈を補強するであらう。

(3) 隠遁型(retreatism)は、脱政治的態度と政治的無関心の二種類を含んでよいはずであるが、ここでの文脈では、前者のみが問題にされなければならない。本調査のデータでは、「政治のことより自分の生活が大切」という無関心は第4図でも第5図でも第三象限にある態度になっているから、前述のように、有力者への白紙委任型の無関心、つまり、共同体的隷従型の無関心である。従って、これはエンバシー増大によるアノミー型の逸脱ではない。このアノミー型逸脱の「脱政治的態度」は、⁵⁹個人的充足価値バターンの、第4図および第5図における位置から推定されるといえよう。「義理人情にしばられず自分の信念で生きる」「気ままにのんびり暮らしたい」「世の中のためより、めいめいの幸福追求が根本」というこの個人主義の信条は、保守↑革新、政治不信↑政治的制度支持のいずれにも傾斜していない。これは、「反政治」政治不信でも、革新志向の挫折でもない、要するに「脱政治」であり、政治的世界を無視する態度が、この人生態度の保有者の傾向であることを示している。これが、政治を問題にする視点からすれば「隠遁型」の逸脱を代表しているといえる。

以上を総括して、新潟市民の政治的態度の全体構造を概観すれば、一方に「ムラの自治意識」の要素に、積極的な利益志向が結びついた「圧力政治型伝統主義」の態度があり、これは保守の支持基盤となって多数派を形成して

いるものである。これに対抗する形で、他方に、非常に多くの問題をもつ「流動的革新」の種々相があって、今日の少数派の、そして明日の多数を予測させる姿を見せているということになると思う。この内的対抗（ストレーン）構造が予測させる政治的危機の問題を、今回はもっぱら市民の態度・意識の面から分析したのであるが、重要な点はむしろ、この状況を鋭敏に汲みとり、それによって政治の「内生的」変数を急速に変革させる努力にあるといわなければならない。なかでも、「政党の体質」の変革は緊急の必要であり、この調査データはそれを示唆したものであるともいえる。市民性の成熟ポテンシャルの大きな部分が増加してくると、それらが明らかに、確定的な支持政党を見出しえない層を形成することになる、これを暗示したのがこの因子布置図の意味のポイントであるから。とくに革新政党が、この流動的市民層の複雑な欲求体系を、——政治的要求と反政治的心情との厳密な選別をやりながら——汲みあげてゆく「触媒的」な代表能力を幾層倍も高めなければならないという課題をもっていることを、鮮明に印象づけている。

この問題に踏みこめば、そこは「政党論」の課題になり、本稿の範囲を越えることになる。しかし、補足的暗示にとどめるならば、その問題指摘は、この結論部の不可欠な要素となるであろう。マートンの逸脱行動の第四類型は「反逆型」であり、その名称の最大逸脱的ニュアンスにも拘わらず、その概念内容は建設的なものであった。つまりそれは目標に関しても制度的手段に関しても”±”であり、老朽化した旧来様式に、新しい目標設定、新しい制度機構を代置させる行動様式を指している。停滞・安定型社会において、人生の裏街道を歩む少数者がつくるサブ・カルチャーとしてのヤクザ集団、地下活動をおこなう秘密結社のセクトの世界には確かに最大逸脱的反逆（rebellion）はあるであろう。しかし、社会的価値の「転換」それ自体が、達成さるべき「制度的目標」となる変動期社会においては、この様式が必要な建設的行動パターンをなすといわなければならない。

マートンの場合は、制度化された文化目標の内容を、「金銭的成功」として具体化した場合の分析であった。それ故、金銭的犯罪（目標強調故の制度的手段の侵犯）などを、「刷新型」とすることに對置して、革命運動などを含む価値志向運動がこの「反逆型」に入ることになったのであるが、本稿のコンテクストに立つて、政治の革新（あるいは政治の志向目標⇨価値転換）を、制度化された文化目標概念の内容とすれば、前の分析のように、目標の過剰要求故の逸脱が、反政治的ラジカリズムという「刷新型」逸脱であり、これとの対比において、「反逆型」(rebellion)——その名称はすでに全く不適切になるが——は次のような政治的行動パターンを指すことになるであらう。

リアリティ・テストイング（現実社会の二〇世紀的変貌それ自体による検証）によって、権威が著しく失墜し、それ故にこそその硬直がいつそう目立つようになったイデオロギーへの依存を離脱し、産業社会以後に生きる人間の基本的欲求が生みだす価値を編集しなおす形で、政治の変革目標を再構成すること、これを追求する手段的装置（媒介装置）としての政党の組織についても、たとえば、前衛伝説の清算、官僚制の克服、などに取り組むなかで、問題解決型の「一時的システム」(temporary system)——Warren Bennis⁽¹⁸⁾——である新しい市民（住民）運動に対応する多元的要求集約装置、葛藤する利害を媒介収斂的に政策形成にもってゆく企画の産出履行の装置として最適な組織模型を模索すること、などであらう。いずれにせよ、そこには、ポスト・産業社会に向かう市民生活、市民意識、住民運動、大衆運動、社会福祉活動、コミュニティ・オーガニゼーション等々についての実態研究が、つまり、未来のための現在研究が加速的に蓄積されなければならないという課題の山積していることが明白なのである。（一九七三、五、二九）

〈注〉

- (1) Weber, M.; „Typen der Vergemeinschaftung und Vergesellschaftung“ in *Wirtschaft und Gesellschaft*.
また「一般社会経済史要論」(黒正・青山訳、岩波書店)。
- (2) 拙稿「社会意識に関する次元分析の論理と技法」(社会学評論、第七〇号)、拙稿「政治的支持システムの構造分析」(新潟大学教養部研究紀要第一集)
- (3) Hagen, E. F., *ON the Theory of Social Change*, 1962.
- (4) Lerner, D., *The Passing of Traditional Society, Modernizing the Middle East*, 1958.
- (5) 白鳥令『政治発展論』(東洋経済新報社) 一〇一—一〇二ページ。
- (6) 同書、一〇一—一〇三ページ。
- (7) Fromm, E., *Man for Himself*. (谷口・早坂訳、人間における自由、創元社)
- (8) Maslow, A. H., *Toward a Psychology of Being*. (上田吉一訳、完全なる人間、誠信書房)
- (9) Eysenck, H. J., *The Structure of Human Personality*, 1953.
- (10) Adorno et. al., *The Authoritarian Personality*, 1950.
- (11) 白鳥令、前掲書、一一〇—一一一ページ。
- (12) 同書、一一〇ページ。
- (13) Merton, R. K., *Social Theory and Social Structure*, Chap. IV, V.
- (14) 清水速雄『政治と反政治のあいだ』(ダイヤモンド社)、五〇—五七ページ。
- (15) 同書、七六—七八ページ。
- (16) 同書、六五—六六ページ。
- (17) Smelser, op. cit. (会田・木原、前掲訳書、二三四—二九六ページ)。
- (18) W. Bennis, *The Temporary Society*, 1968. (佐藤慶幸訳、流動化社会、ダイヤモンド社)

付録，調査概要，質問表：単純集計 N=607

＜調査概要＞

- 1 調査時期：昭和47年7月6日～10日
- 2 対 象：新潟市全有権者（昭和46年9月1日現在登録）
- 3 サンプルング方法：無作為2段抽出法
- 4 調査方法：個人面接法
- 5 サンプル数：800
- 6 有効回答数：607（76%）
- 7 サンプル構成：単純集計表 質問22以下参照

質 問

問1 お宅では、どの程度の近所づきあいをしていますか。

- | | |
|-------------------------------|------|
| 1 お互いの家に遊びに行くような親しいつきあいをしている。 | 45.0 |
| 2 いっしょに買物に行く程度のつきあいをしている。 | 12.4 |
| 3 挨拶をかわす程度で、ほとんどつきあいはない。 | 37.1 |
| 4 その他 | 4.0 |
| 5 D・K, N・A | 1.6 |

問2 あなたは、市政について満足していますか。

- | | | | | | |
|------------|------|-------|------|-------|------|
| 1 満 足 | 8.6 | 2 普 通 | 61.9 | 3 不満足 | 18.3 |
| 4 D・K, N・A | 11.2 | | | | |

問3 あなたは、今年（昭和47年度）の市の予算内容について見たり、聞いたりしたことがありますか。

- | | | | | | |
|-------|------|-------|------|------------|-----|
| 1 あ る | 28.2 | 2 な い | 66.6 | 3 D・K, N・A | 5.3 |
|-------|------|-------|------|------------|-----|

問4 あなたは、市役所で、毎月3回発行している市報「にいがた」をお読みになっていますか。

- | | | | |
|--------------|------|---------------|------|
| 1 いつも読んでいます。 | 56.8 | 2 ときどき読んでいます。 | 32.0 |
| 3 読まない。 | 9.6 | 4 配布してこない。 | 1.2 |
| 5 D・K, N・A | 0.5 | | |

1 ある 4.0 2 ない 94.7 3 D・K, N・A 1.3

1 都市開発事業 9.7

2 道路・交通対策（道路整備および交通安全対策など） 61.4

3 公害対策 38.7

4 災害防止対策（火災・その他） 14.3

5 生活環境対策（清掃・緑地など） 43.5

6 医療・保健対策 38.4

7 社会福祉対策（身障者、老人対策・保育所など） 37.6

8 文教対策（教育施設の拡充・学校新設など） 14.0

9 住宅対策 17.5

10 その他 () 1.3

11 D • K, N • A 5.9

問7 あなたは、市政に対する要求がある場合、つぎのどのような方法で解決されますか。(MA)

1 個人で市役所と交渉する。 12.7

2 同じ要求を持つ人達とグループを作って交渉する。 25.7

3 地域組織（自治会・町内会） 46.1

4 職能組織 5.9

5 地域有力者を通じて 12.9

6 市議会議員を通じて 21.1

7 政党組織を通じて 3.6

8 その他 () 2.6

9 D • K, N • A 15.7

問８ あなたは新聞の政治記事や、テレビ・ラジオの政治解説番組に興味をもっておられますか。

1 大いにもっている。 2.7 2 普通の程度にもっている。 57.0

3 あまりもっていない。 15.7 4 まったくもっていない。 4.0

5 D・K, N・A 1.6

問9 あなたは、選挙の時、投票しようとする候補者や、政党についての知識を主として何によってえられますか。(MA)

1 新聞 69.2 2 雑誌 7.4 3 書物 3.1

4 テレビ 62.8 5 ラジオ 14.8 6 家族 18.9

7 近所 6.8 8 社交関係 11.9 9 職場 10.8

10 政党関係 15.2 11 その他 3.0 12 DK, NA 2.6

問10 あなたは、選挙の時、政党や、候補者をきめる場合、どのようなことを考えてお決めになりますか。つぎの項目の中からいくつでも選んでください。(MA)

1 自分の思想に近い政党、候補者 52.2

2 政府がこれまでやってきたこと。 14.0

3 政党の活動状況 27.2

4 職業上の利益 14.0

5 地域の利益 21.3

6 自分の期待 29.5

7 友人・社交 9.2

8 家族の社会的地位 8.3

9 その他 3.5

10 D・K, N・A 5.8

問11 ここ10年間ほどの衆議院議員選挙で、投票する政党（候補者ではない）を変えたことがありますか。

1 変えることなく同じ政党に投票してきた。 58.3

2 投票政党を変えたことがある。 24.7

3 政党は変えないが棄権したことがある。 8.7

4 D・K, N・A 8.2

問12 いまもし総選挙（衆議院選挙）があるとすれば、何党の候補に投票しますか。

1 自民 39.2 2 社会 19.9 3 公明 2.5

4 民社 3.6 5 共産 2.5

- | | | | | | |
|---|------------|------|---|------------|------|
| 6 | いまは決められない。 | 10.9 | 7 | 候補者をみてきめる。 | 14.0 |
| 8 | いいたくない。 | 3.6 | 9 | D・K, N・A | 3.8 |

問13 日本の政党政治のこれからのあり方について、つぎのような意見があります。
あなたは、どの意見に一番賛成ですか。

- | | | |
|---|--|------|
| 1 | 何といっても政党が民主政治の中心だから、自分たちの味方となってくれる政党をもちたててゆくことが大事である。 | 70.5 |
| 2 | 政党などたよりにならないから、自分たちで必要に応じて市民運動をやって、政治に対して抗議していくことの方が大事である。 | 10.7 |
| 3 | 政党や政治のことなど自分には関係がない。 | 9.4 |
| 4 | その他 | 9.4 |

問14 あなたは、選挙運動の手伝いとか、政治資金の募金活動のような、政治活動をしたことがありますか。

- | | | | | | | | | |
|---|----|------|---|----|------|---|----------|-----|
| 1 | ある | 14.0 | 2 | ない | 85.2 | 3 | D・K, N・A | 0.5 |
|---|----|------|---|----|------|---|----------|-----|

問15 あなたは、あなたご自身の政治についての判断力を養う上で、主に影響をうけているのは、つぎの項目の中のどれとどれでしょうか（MA）

- | | | | | | | | | |
|----|---------------------|------|---|--------|-----|---|------|------|
| 1 | 家庭 | 19.4 | 2 | 学校での学習 | 3.3 | 3 | 友人関係 | 15.2 |
| 4 | 職場でのつきあいや労働組合を通じて | | | | | | | 21.7 |
| 5 | 同じ商売仲間でのつきあいや団体を通じて | | | | | | | 9.9 |
| 6 | 政党の活動や機関紙 | | | | | | | 8.9 |
| 7 | 社会教育活動 | | | | | | | 6.3 |
| 8 | 新聞・テレビ・ラジオの報道や解説 | | | | | | | 68.7 |
| 9 | どれもでない。 | | | | | | | 4.8 |
| 10 | D・K, N・A | | | | | | | 7.1 |

SQ 一番影響をうけているものを一つだけあげるとすれば、どれでしょうか。

- | | | | | | | | | |
|---|---------------------|-----|---|--------|-----|---|------|------|
| 1 | 家庭 | 7.7 | 2 | 学校での学習 | 1.5 | 3 | 友人関係 | 5.1 |
| 4 | 職場でのつきあいや労働組合を通じて | | | | | | | 12.0 |
| 5 | 同じ商売仲間でのつきあいや団体を通じて | | | | | | | 4.9 |
| 6 | 政党の活動や機関紙 | | | | | | | 3.3 |
| 7 | 社会教育活動 | | | | | | | 1.6 |

- 8 新聞・テレビ・ラジオの報道や解説 51.7
 9 どれでもない。 3.5
 10 D・K, N・A 8.6

問16 つぎにあげるいくつかの意見について、賛成でしょうか。反対でしょうか。簡単に賛成、反対でお答えください。（質問を読んで、答えを聞く）

- 1 政治のことより自分の生活の方が大切である。
 1 賛成 68.0 2 反対 12.5 3 D・K, N・A 19.4
 2 政治家は、市民の生活をよくするものである。
 1 賛成 77.3 2 反対 9.1 3 D・K, N・A 13.7
 3 政治家は、私生活が清潔でなければならない。
 1 賛成 82.9 2 反対 5.8 3 D・K, N・A 11.3
 4 政治家の犯罪は、一般市民の犯罪よりも重く罰すべきである。
 1 賛成 64.7 2 反対 15.8 3 D・K, N・A 19.4
 5 政治家は、その政治目的を実現するためには、手段を選んではならない。
 1 賛成 37.1 2 反対 43.0 3 D・K, N・A 19.9
 6 政治のことは、政治家にまかせておけばよい。
 1 賛成 33.4 2 反対 56.8 3 D・K, N・A 9.7
 7 政治家は、政治資金を集めるために法律をおかしてもやむをえない。
 1 賛成 3.8 2 反対 89.8 3 D・K, N・A 6.4
 8 政治家は、自分の主義・主張にどこまでも忠実でなければならない。
 1 賛成 81.4 2 反対 8.1 3 D・K, N・A 10.5
 9 政治家の言動は信用できる。
 1 賛成 16.8 2 反対 52.4 3 D・K, N・A 30.8

問18 つぎにあげるいくつかの質問について、簡単に答えてください。（質問を読んで答えを聞く。）

- 1 いろいろな社会問題が山積している今日、政府は十分その任務を果しているとお考えですか。
 1 果している。 10.2 2 果していない。 73.3
 3 D・KN・A 16.5

2 あなたの日常生活に、中央の政府は、かなりの影響力をもっているとお考えですか。

1 もっている。 40.4 2 もっていない。 39.2

3 D・K, N・A 20.4

3 あなたの日常生活に、県や市町村の政治は、かなりの影響力をもっているとお考えですか。

1 もっている。 52.7 2 もっていない。 28.3

3 D・K, N・A 18.9

4 あなたは、中央の政府と、県や市の自治体政府のどちらを身近にお感じになりますか。

1 中央の政府 12.0 2 自治体政府 71.0

3 D・K, N・A 17.0

5 あなたは、中央の政府が、地方自治に介入してくるのはいけないことだとお考えですか。

1 いけない。 23.4 2 介入してもよい。 44.5

3 D・K, N・A 32.1

6 あなたは、これまで、政府や、県・市の自治体政府の政策や決定に影響をおよぼすために何かしたことがありますか。

1 ある 7.9 2 ない 86.8 3 D・K, N・A 5.3

7 あなたは、ご自身で中央の政府や、県・市の自治体政府になんらかの影響力をもっているとお考えですか。

1 もっている。 16.5 2 もっていない。 68.4

3 D・K, N・A 15.2

8 市民が、中央の政府や、県・市の自治体政府に何かしてもらおうとき、政治家や地元有力者のコネがきくと思いますか。

1 思う 67.4 2 思わない 17.1 3 D・K, N・A 15.5

9 給料が同じなら民間企業よりも政府機関で働いた方がよいと思いますか。

1 思う 46.0 2 思わない 34.4 3 D・K, N・A 19.6

10 あなたは、税金の負担が公平におこなわれていると思いますか。

- 1 思う 8.9 2 思わない 79.4 3 D・K, N・A 11.7
- 11 あなたは、政府のサービスさえ向上すれば、税金は今よりあがってもさしつかえないとお考えですか。

- 1 さしつかえない。14.2 2 反対 76.4 3 D・K, N・A 9.4
- 12 あなたは、政府のサービスが少しぐらい悪くなっても、税金は、今よりも安くなった方がよいとお考えですか。

- 1 安くなった方がよい。 38.9 2 反対 38.9
- 3 D・K, N・A 22.0

問19 あなたは、ふだんの政党を支持していらっしゃいますか。

- 1 自民 42.7 2 社会 23.4 3 公明 3.0
- 4 民社 4.0 5 共産 2.5 6 その他の政党 —
- 7 支持政党なし 14.7 8 D・K, N・A 9.9

問20 それでは、あなたは、この政党だけは、絶対に支持できないという政党がありますか、どの政党ですか。(SA)

- 1 自民 5.8 2 社会 1.8 3 公明 14.7
- 4 民社 1.3 5 共産 33.6 6 その他 1.6
- 7 支持できない政党はない 22.7 8 D・K, N・A 18.5

問21 つぎに、人の生き方について、二つの対立する意見を並べてみました。あなたは、どちらの意見に賛成ですか。

- | | | | |
|--|------|--|------|
| 11 この世は自分ひとりが頼りだ。実力を養って競争にうち勝つ覚悟が何より大切だ。 | 21.4 | 12 人間ひとりでは何もできない。人生は何よりも信頼と協調が必要だ。 | 76.1 |
| 21 他人から受けている恩義や愛情に感謝する気持が何より大切だ。 | 73.1 | 22 自分の信念に生きるのが大切だ。義理や人情にしばられてはならない。 | 23.4 |
| 31 一生けんめい働いて高い地位をえたい。そのためには、たえず努力することが大切だ。 | 44.2 | 32 あくせく働いてまで高い地位をえたいと思わない。気ままにのんびりくらしたい。 | 51.4 |
| 41 会社あつての労働者、社会あつて | | 42 世のため、人のため自分をかえり | |

の個人だ。人みな全体の繁栄のため
に自分の役目を果たすことが大切だ。

67.2

みず尽すというのは自分をあざむい
ている。ひとりひとりが自分の幸福
を追求するのが根本だ。

27.3

51 人の生きがいはい自分の能力を十分
発揮して成功をかちとったり、すぐ
れた業績をあげたりすることにある。

30.0

52 自分ひとりの業績や成功よりも、
世の中に役立ったり、社会の進歩発
展に役立ったりするのが大切だ。

61.4

61 社会を変えるような大きな仕事に
打ちこみたい。そのために家族や身
近かな人との暖かいつなかりを捨て
なければならないことがあってもや
むをえない。

15.3

62 家族や身近かな人とのつながりを
何よりも大事にしたい。それを二の
次にして国や社会のことを考えても
何にもならない。

80.2

問22 さて、7月5日に自民党総裁選挙がおこなわれて、新しい総裁がきました。

自民党総裁即内閣総理大臣になるわけですが、あなたは新しい総裁にどのようなこ
とを期待されますか。

SQ1 政治の基本姿勢については、

1 いままでおこなわれてきた自民党政府のやり方を今後も続けていく。 9.6

2 いままでとは、違った新しい政治のやり方をしていく。 78.9

3 どちらでもない。（具体的に。） 4.1

4 D・K、N・A 7.4

SQ2 基本的な政策についてはいかがでしょうか。（SA）

1 日本とアメリカの関係を最重要視した政策 4.9

2 1日も早く中国と国交回復をすること。 13.7

3 景気回復政策 16.5

4 経済大国として国際平和に積極的に寄与する政策 9.6

5 国内の過密、過疎をなくして、日本全体の均衡のとれた発展をめざす政策
38.1

6 その他 1.5

7 D・K、N・A 15.8

問23 総裁が変わることによって、自民党の政治に変化が期待できますか。

- 1 自民政権が続くかぎり、総裁が変わっても新しい政治などまったく期待できない。 16.1
- 2 同じ自民政権でも総裁が変われば、総裁の個性によっては、新しい政治が期待できる。 50.9
- 3 どちらとも言えない。 26.2
- 4 D・K、N・A 6.7

フ ェ ー ス ・ シ ー ト

問24 (性 別)

- 1 男 43.8 2 女 56.2

問25 (年 令) あなたのお年は満でいくつですか。

- 1 20～24 8.9 2 25～29 13.3 3 30～34 14.5
- 4 35～39 10.2 5 40～49 22.7 6 50～59 14.8
- 7 60才以上 15.5

問26 (学 歴) あなたは、学校はどこまでいらっしゃいましたか。(在学、中退は卒業とみなす)

- 1 小・高小・新中卒 49.6 2 旧中・新高卒 39.9
- 3 旧高専大・新大・短大卒 9.9 4 不 明 0.5

問27 (本人職業) あなたのご職業は何ですか。＜いわゆる主婦であっても、家の職業を手伝っている場合は、1～6の方に入れる＞

- 1 農林・漁業 6.9 2 商工・サービス業、自由業 17.6
- 3 経営・管理職 4.1 4 専門・技術職 7.1 5 事務職 11.9
- 6 労務職(販売・サービス、生産工程従事者) 15.8 7 無 職 9.1
- 8 主 婦 24.9 9 学 生 0.2 10 その他 2.5

問28 (収 入) お宅の最近1年間(昭和46年7月～47年6月)の総収入は、大体税込みでどれ位だったでしょうか。大体のところで結構です。

- 1 30万未満 2.8 2 30～50万 4.3 3 50～70万 4.0
- 4 70～100万 11.4 5 100～150万 23.7 6 150～200万 15.3
- 7 200～300万 10.5 8 300万以上 4.3 9 不 明 11.7
- 10 D・K、N・A 12.0

問29（居住年数） あなたは、現在お住まいになっているところに生まれてからずっと住んでいらっしゃいますか。

- | | | | | | |
|---|-----------------|------|---|---------------|------|
| 1 | 生まれてからずっと住んでいる。 | 21.7 | 2 | <u>そうでない。</u> | 78.1 |
| | | | | ↓ | |
| 3 | D・K, N・A | 0.2 | | SQ1, 2へ | |

SQ1 現在のところにお住まいになって何年位になりますか。

- | | | | | | | | | |
|---|-------|------|---|------|------|---|-------|------|
| 1 | 1年未満 | 1.6 | 2 | 5年未満 | 30.0 | 3 | 10年未満 | 17.3 |
| 4 | 10年以上 | 29.2 | 5 | 不明 | — | | | |

SQ2（前住地） 現在のところにお住まいになる前は、どこにお住まいでしたか。

- | | | | | | |
|---|---------|------|---|-----------|------|
| 1 | 市内の他の地区 | 47.9 | 2 | 新潟県内の他市町村 | 22.3 |
| 3 | 他県・国外 | 7.4 | | | |

問30（住居形態） あなたの現在のお住まいは、つぎのどれにあたりますか。

- | | | | | | | | | |
|-------|------|---------|-----|--------|-----|---|---------|-----|
| 自家……1 | 一戸建て | 74.6 | 2 | 分譲アパート | 0.2 | 3 | 分譲マンション | — |
| 社宅……4 | 一戸建て | 2.1 | 5 | アパート | 4.0 | | | |
| 借家……6 | 一戸建て | 9.1 | 7 | 公営アパート | 3.3 | 8 | 民営アパート | 4.1 |
| | 9 | その他（記入） | 2.3 | | | | | |

問31（階層意識） かりに現在の日本の社会全体を、ここに書いてあるように5つの層に分けるとすれば、あなたご自身は、このどれにはいると思いますか。

- | | | | | | | | | |
|---|-----|------|---|-----|------|---|----------|------|
| 1 | 上 | 0.8 | 2 | 中の上 | 16.3 | 3 | 中の下 | 41.2 |
| 4 | 下の上 | 15.7 | 5 | 下の下 | 8.7 | 6 | D・K, N・A | 17.1 |

問32 市内の地域区分

- | | | | | | |
|----|----------------|------|---|-----|------|
| 1 | 赤塚・中野小屋・内野・坂井輪 | 20.1 | 2 | 関屋 | 10.0 |
| 3 | 本庁 | 14.5 | 4 | 入舟 | 5.9 |
| 5 | 鳥屋野 | 11.2 | | | |
| 6 | 大江山・曾野木・両川 | 3.5 | 7 | 沼垂 | 13.0 |
| 8 | 石山・大形 | 10.2 | 9 | 山の下 | 7.7 |
| 10 | 松浜・南浜・濁川 | 3.8 | | | |